

大木6式土器の諸系統と変遷過程

今村 啓爾

要旨 縄文時代の長距離におよぶ人間集団の移動を把握する準備として、前期末に東北地方中～南部に分布した大木6式土器の細い変遷過程を整理した。大木6式は長胴形と球胴形の2種類を主体とする組成で、それぞれにさらに北部と南部を中心とする地域差がある。北部では長胴形と球胴形の文様が類似するので、後者を「長胴系文様の球胴形」と呼ぶ。南部の球胴形は北部と異なる文様帯の配置で、浮線文を有するものが多いので「浮線文系球胴形」と呼ぶ。この浮線文球胴形は北部に対する進出力が強だけでなく、中部日本の土器と多くの共通性を保持し、土器情報の伝達という役割を担った。これらの諸系統の並行関係を考えながら全体を5期に分け、中部日本の細分編年と対比させた。

はじめに

筆者は最近、「縄文前期末における北陸集団の北上と土器の動き」¹⁾という論文で次のように述べた。

縄文前期末に北陸の土器系統を担う集団が現在の秋田市周辺に移住したが、彼らはしばらくの間、故地との間で往復を維持したらしい。進出した集団はまもなく東北地方北部の円筒下層d式と接触したが、その影響はこの往復によって富山・石川の北陸西部にもたらされ、朝日下層式が生まれた。まもなく日本海沿岸は朝日下層式と円筒下層d式の系統によって席卷されることになるが、後者の要素は青森・秋田から直接南下するものと、北陸西部から朝日下層式の要素として東に拡がるものがあった。北陸に対する円筒式土器の新たな影響はまもなく見られなくなるが、秋田市周辺まで海岸線に沿って主体的に分布した北陸系土器は、北陸における変化とほとんど同じ変化を中期初頭まで維持した。円筒下層d式と北陸の土器の中間地域である東北地方中・南部には、普通大木6式が分布したと考えられているが、東北地方の日本海沿岸部では、実際には大木6式は不完全なありかたでわずかに分布していただけであった。そして上記のような事態の進行とともにその地域からほとんど姿を消したのである。

以上の現象は主に大木6式の分布（といわれる）地域内で大木6式の時間幅の中で進行したものであるから、その研究の前提として大木6式内での地域差や細かい年代的変遷過程の解明が必要であったことはいうまでもない。しかしいくつかの系統的流れからなり、地域差・年代的变化がともに大きい大木6式は、上記研究の一部として扱うには内容が複雑すぎる。そこで上記論文とは切り離して記述したのが本稿である。

私は20年前に大木6式の細分に簡単に触れたことがあり²⁾、今回は十倍近くに増えた資料をもとに詳しく検討しなおしたわけであるが、基本的な点で変更は必要なかった。大木6式の変遷について最近松田光太郎氏がまとめた研究を発表され³⁾、従来になく詳しく広い分析を示した。本稿と

重なる部分は相当大きく、細分の各段階も最後の5期に相当する部分を松田氏が中期に繰り入れてしまった点を除いてほぼ同じである。しかし松田氏の研究は上記の北陸系土器の移動現象を分析する土台としては不十分であるし、一括出土例を重視する松田氏に対し、私は土器の連続的な変遷過程を解明し、それを一定のメルクマールで区切る方法をとるため、土器の変遷を分かりやすく説明していると思う。「浮線文系球胴形」という、東北地方と中部日本の土器情報交換の媒介になった特殊な系統の存在も指摘した。内容を比較していただければこの論文を発表する意味がないわけではないことが理解いただけるであろう。松田氏は続く別の論文で⁴⁾、太平洋側の地域における大木6式と円筒下層d式の融和的な関係を明らかにされたが、私は上記論文で、日本海側ではまったく異なり、両者が排他的とも見えるあり方を示すことを明らかにした。

筆者はこれら2編に加え「松原式土器の位置と踊場系土器の成立」⁵⁾という第3の論文をまとめた。これら3編は中部日本・日本海沿岸部・東北地方と、中心をずらしながらも3者一体となって全体を形成し、東日本における前期終末を描写するように計画されたものである。

はじめに章立てについてふれておきたい。大木5b式から大木6式初期の段階では地域差も長胴形と球胴形の分化もそれほど大きくないので、第1章として一括して論じるが、次の段階から地域差も2種類の器形の分化もしたいに顕著になるので、別々に見たほうが連続的変化を説明しやすい。器形の区分を優先させるべきか地域差を優先させるべきか迷ったが、結果的に長胴形と球胴形の区別を第1としてそれぞれ第2章と第3章として扱い、各章の中で地域差を説明することになった。長胴形には岩手・宮城北部を中心とする地域色と、山形・福島を中心とする地域色がある。それぞれ「北部」・「南部」と書くが、大木6式の分布圏内での北と南という意味である。球胴形の中にも2つか3つに分けられる系統があるが、これはとりあえず北部に中心をおく系統と南部に中心をおく系統、両者の折衷的な系統といってよい。ただ本来の北部の系統は南部からの影響を受けて折衷的なものになる。球胴形と長胴形はもともと北部でも南部でもそれぞれ近似性を有し、明確な区別のないものであったが、第2期、第3期と進むにつれて北部でも南部でも区別が明確になる。しかし第4期になると再び使われる文様の区別がなくなり始め、融合に向かう。

大木6式の分期にあたっては、まず資料の充実している岩手県の長胴形を基準にして5期に区分し(第2章)、次にこの系統と共通する文様を有するため対比のしやすい北部の球胴形(長胴系文様の球胴形)をこれに対比させた(第3章1)。独立性の強い南部を中心とする球胴形(浮線文系球胴形、第3章2)はもっとも分期と対比のしにくい系統なのであるが、これについては、器形など一般的な類似性のほか、北部と南部の中間的な姿を示す一群の球胴形(浮線文系球胴形に属するが沈線文を用いる)が手がかりになる。

北陸に進出する大木6式は浮線文系球胴形を主体とするから、北陸系の土器は以上の対比の順序を逆に進む3段階の対比作業をへて大木6式の細分に対応させられることになる。秋田に進出した北陸系土器と大木6式を時間的に対応させるのは、近距離に存在したにもかかわらず意外に面倒なのである。大木6式末期については北陸系土器と円筒下層系土器の伴出事例が多い⁶⁾ので、その対

比が北陸系と大木6式末期の対比にも役立つ。

結論を先取りする形で従来の分期との関係を述べておく。今回の1期は1985年の古段階、2期は古段階と中段階の間、3期は中段階、4期・5期は新段階にはほぼ対応する。松田氏の分期に対比するならば、1期が古段階、2期が中段階古相、3期が中段階新相、4期が新段階で、松田氏には5期に相当する部分がないが、氏が大木7a式としたものの中に5期の資料が含まれている⁷⁾。関東の十三菩提式との対比では、1期が古段階、2期は古段階または中段階、3期は中段階、4期・5期が新段階となる。3期に並行する十三菩提式中段階や北陸の真脇式⁸⁾は相当な時間的変化を含む型式なので、将来的にはその細分にあわせた大木6式3期の細分も必要になるであろう。

日本海側、とくに秋田県の沿岸部では、内陸や太平洋側と比べて大木6式の資料が顕著に少ない。そして時期が下るほど一層少なくなる。この地域の大木6式の最大の問題は、変遷というよりそれがこの地域から退去する経過であるが、この現象自体、大木6式の細分によって明らかにされたものである。しかしすでに別稿で扱ったので、今回はあまりとりあげない。最後に第4章として、関東の編年との対比と前期と中期の厳密な境界線の問題を扱う。

第1章. 大木5式から6式へ

1. 大木5b式と6式1期の区分 (1図, 2図)

大木6式が成立する時期にはまだ地域差がそれほど大きくないし、球胴形と長胴形の区別もそれほど明確ではないので、全体を一括して大木5式から6式への変化を見よう。

大木5式は興野義一氏によって5a式と5b式に分けられた⁹⁾。大木5式から6式への変化を理解するうえで文様帯の変化と連続性という視点が重要であるが、5b式の場合、口縁の折返し部(1図2の口縁部分)とその下の幅の狭い頸部文様帯(1図2, 3, 4)からなり、それより下は縄文となるものがほとんどである。折返し部は5a式でジグザグ貼付文であったとき(1図1)の面影が上下端の刻みとして残っている。縄文部に5a式の名残の文様が貼付文で表現されるものが稀にある。口縁の折返し部が省略され、平滑になったものは半数以上におよぶが、口唇の厚みを少し増したものが多い(1図3)。頸部文様帯を宮城県北部築館町の嘉倉貝塚¹⁰⁾の豊富な資料で見ると、上限を刻みのある浮線文1本、下限を刻みのない細い浮線文1ないし数本で画するものが普通であるが、約束は厳密でなく、ほかにもいろいろな場合があり、浮線文が沈線文におきかえられたものもあるし、ときには区画しないこともある。頸部文様帯の中は、浮線文で構成されるものと沈線文で構成されるものがあり、前者の場合は細かいジグザグ文がほとんどで(1図2, 3, 5)、後者の場合は上下に対向する弧線が多く(1図4)、山形(大きなジグザグ)、水平線などもある。沈線文が用いられる場合、下の区画線も沈線が用いられることが多いが、上限の刻み浮線文は沈線化しないことが多い。これは大木6式頸部の刻み隆起線につながる。大木5b式における頸部文様

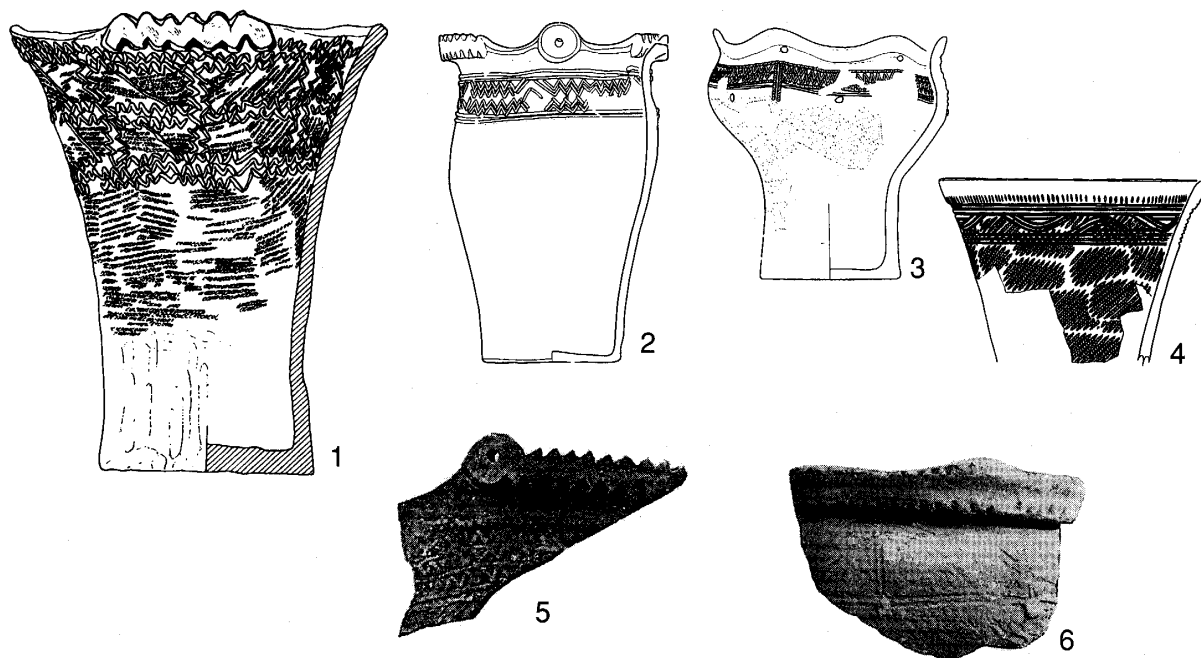
帯の扱いの多様性が大木6式初期におけるその多様性につながったのであろう。

このような大木5b式からわずかに変化した土器を以下に見る(2図)。

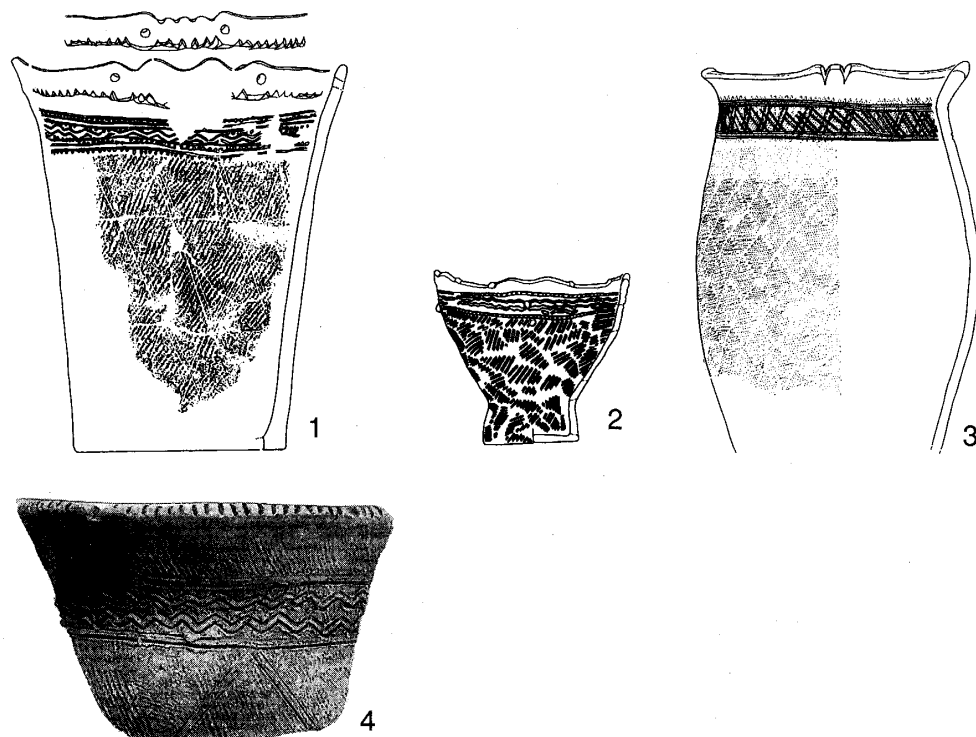
山形県米沢市大檀例¹¹⁾(2図1)は一見大木5b式そのものであるが、頸部文様帯上下の区画の刻み浮線が沈線で、胴部縄文の上に重ねて浅い沈線による交叉文が見られる。胴部における沈線の交叉は大木6式のもっとも初期に多く見られる文様であるから、まさに5b式と6式の境目の土器ということになる。

福島県上道上遺跡¹²⁾の2図2も、頸部文様帯の区画が、刻み浮線に替えて結節沈線になっている。宮城県小梁川¹³⁾の2図3も大木5b式といってもいいような土器であるが、口縁無文部下の刻みは痕跡的で、頸部文様帯の中は大木5b式には例を見ない交叉線で、これは5b式の山形と関係するとともに大木6式初期の胴部の交叉線とも関係するのであろう。小梁川遺跡は大木5b式が全く出ていない(大木5a式はある)遺跡であるから、この点からもこの土器は大木5b式ではなく6式に属するであろう。

山内清男基準資料¹⁴⁾の「大木5式」写真のチ(2図4)は、頸部文様帯が大木5b式のシグザグ浮線の沈線化したもので、これは大木5b式には少なく、大木6式の前半に大いに用いられるようになるものである。口唇には刻みが残っている。胴部文様は一部しか見られないが、交叉線または大きな山形であろう。胴部文様は岩手・宮城の大木6式で発達し、大木6式前半に文様の中心になるが、その誕生を示すものである。ただ厳密にいうと、大木6式の胴部文様には嘉倉遺跡例(5図2)のように大木5b式から続くものも確かにあるので、すべてが新生とは言えない。胴部文様帯の発達の差は北部と南部を分ける大木6式の地域色のなかでもっとも顕著なものである。



1図 大木5a式と5b式参考図(1は5a式、他は5b式) 1, 5: 宮城糠塚、2, 3: 宮城嘉倉、
4: 岩手滝ノ沢、6: 岩手中島(写真以外1/8)



2図 大木5b式と6式の過渡的な土器 1：山形大檀、2：福島上道上B、3：宮城小梁川、
4：山内清男資料写真の「大木5式チ」(写真以外1/8)

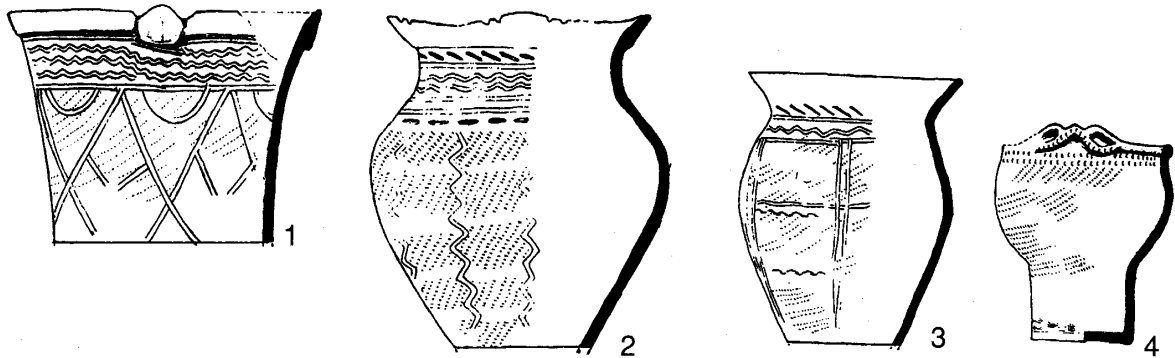
以上のような境界線上ともいべき土器と同時か、すぐ後に来るのが岩手県中島遺跡¹⁵⁾で草間俊一氏が早くに「大木6式のはじめのもの」¹⁶⁾と指摘した土器群で(3図)、大木6式初期に特徴的な厚みの強い口縁部文様帯(無文の場合も多い)の成立とともに、頸部文様帯と胴部文様帯の対比など北東北における大木6式の基本形を獲得している。

ここで「境界線上」と形容した土器については、胴部文様帯の確立を大木5式と6式区分の基準として採用し、すでに大木6式に入っているとみなしたい。山内写真のチの所属型式は、山内氏とわずかにずれて大木6式に入ることになる。松田氏もそう分類している。このような変更に対し拒否反応を示す研究者もあろうが、山内氏の「大木5式」の写真には明確な大木6式4期の土器も含まれているのであるから、山内氏の分類を冒すべからざる聖典として信仰の対象にするならば、大木5式と6式の区分自体が不可能になってしまう。

2. 北部と南部の地域色および長胴形・球胴形の分化

大木6式には北部と南部に中心をおく二つの地域差があり、また器形や文様における球胴形と長胴形の区別があることを初めに述べた。本節ではその分化が進んでいく初期(大木6式1期)の状況を見る。器形分化はそれほど進行しておらず、地域差のほうが顕著である。

まず南部の資料から見よう。福島県山都町上ノ原遺跡(4図1~6)¹⁷⁾、都路村上道上B遺跡(4図10, 11)、山形県米沢市大檀遺跡(4図9)で、先に大木6式最初期として挙げた例を含む土



3図 草間俊一氏が「大木6式のはじめのもの」とした大木6式1期の資料
岩手県中島遺跡 (1/8)

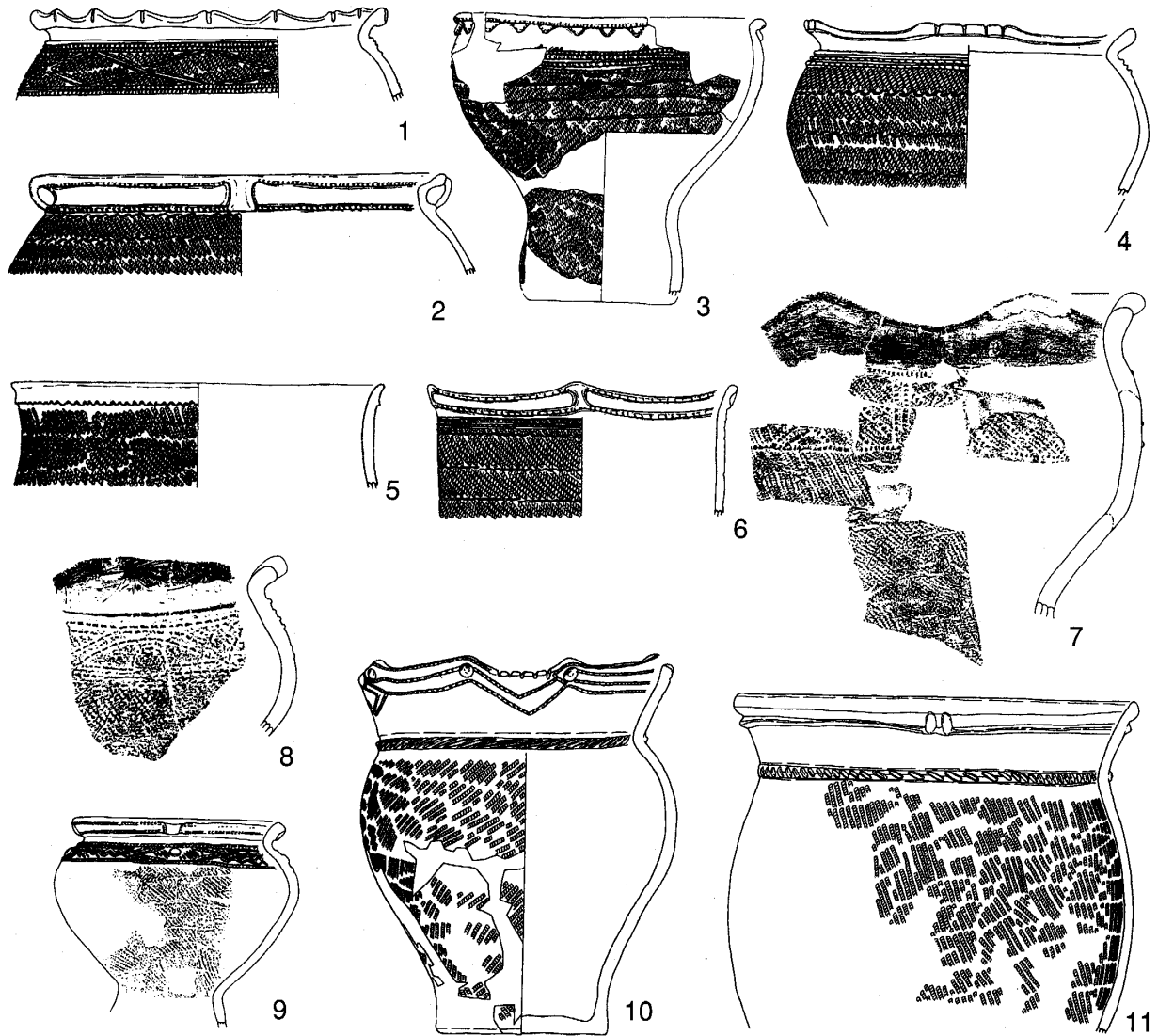
器群が発掘されている。いずれも前後する土器をほとんど含まない、一括性の強い優れた資料である。福島県東和町上台遺跡¹⁸⁾もこの時期のものが多い。これらによって、南部では北部と類似のものを含みつつも全体として相当に異なる土器が存在したことが知られる。全体的に文様が少なく、頸部で強く外折する器形や、その括れ部を水平に回る刻みのある隆起線（結節浮線になるものもある）が特徴的である。口縁に肥厚帯が付くものと付かないものがあり、肥厚に替えるように2本の隆起線を加えたものもある（4図6）。口縁が小さく波うつものもある。全体に水平方向の結節回転文がめだつ。

大木5b式ですでに分化の傾向にあった長胴形と、胴下部が縮約し球胴形に向かう形の違いがより明瞭になっているが、まだ完全な分化とはいえない。下部が縮約するものも、まだ球胴形と呼ぶにはふさわしくない形であるが、分類名として「球胴形」を用いる。この球胴形土器頸部に、上下を水平に区画したしっかりした文様帯（4図1, 7, 8, 9）が多いことは、精製土器としての球胴形のありかたを示す。この文様は刻みのある浮線で表現するものが多いが、沈線文での表現もある。この水平に区画された文様帯は言うまでもなく大木5b式の幅の狭い頸部文様帯（6図参照）から続くもので、南部の球胴形の特徴をなすとともに、時間の経過とともに北部にも広がるものである。

上ノ原4図1は下部を欠くがおそらく球胴形で、くびれ部直下に幅の狭い文様帯を結節浮線で描く。上ノ原4図3では水平に4本の結節浮線であるが、同じ文様帯であろう。鴨ヶ館例¹⁹⁾（4図7）、福島県磐梯町法正尻例（4図8）、大檀例（4図9）も同じように結節浮線による幅の狭い文様帯を有する。以上のような土器の原型は、宮城県築館町嘉倉貝塚の大木5b式の資料中により例がある（1図3）。胴下半部がくびれ、球胴形に近くなった土器で、浮線文による幅の狭い文様帯を有する。岩手県中島遺跡1図6は沈線文を用いた例。

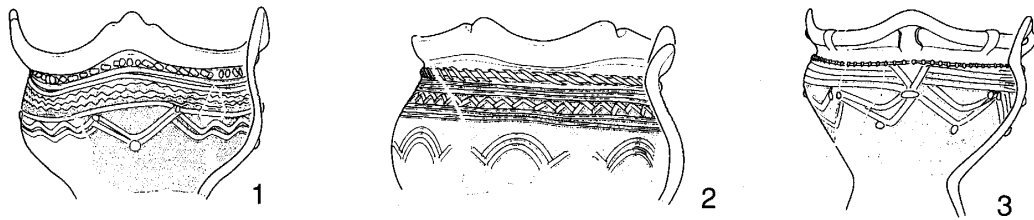
大木6式初期に遺跡全体として単純時期一括の出土例が多い南部に対し、岩手県と宮城県では集落が安定し継続的であるためか、単純な様相での出土例が乏しい。そのため前後の時期と混じった資料からの抽出という作業が必要になる。前節であげた岩手県中島遺跡資料があるほか、岩手県金

大木6式土器の諸系統と変遷過程

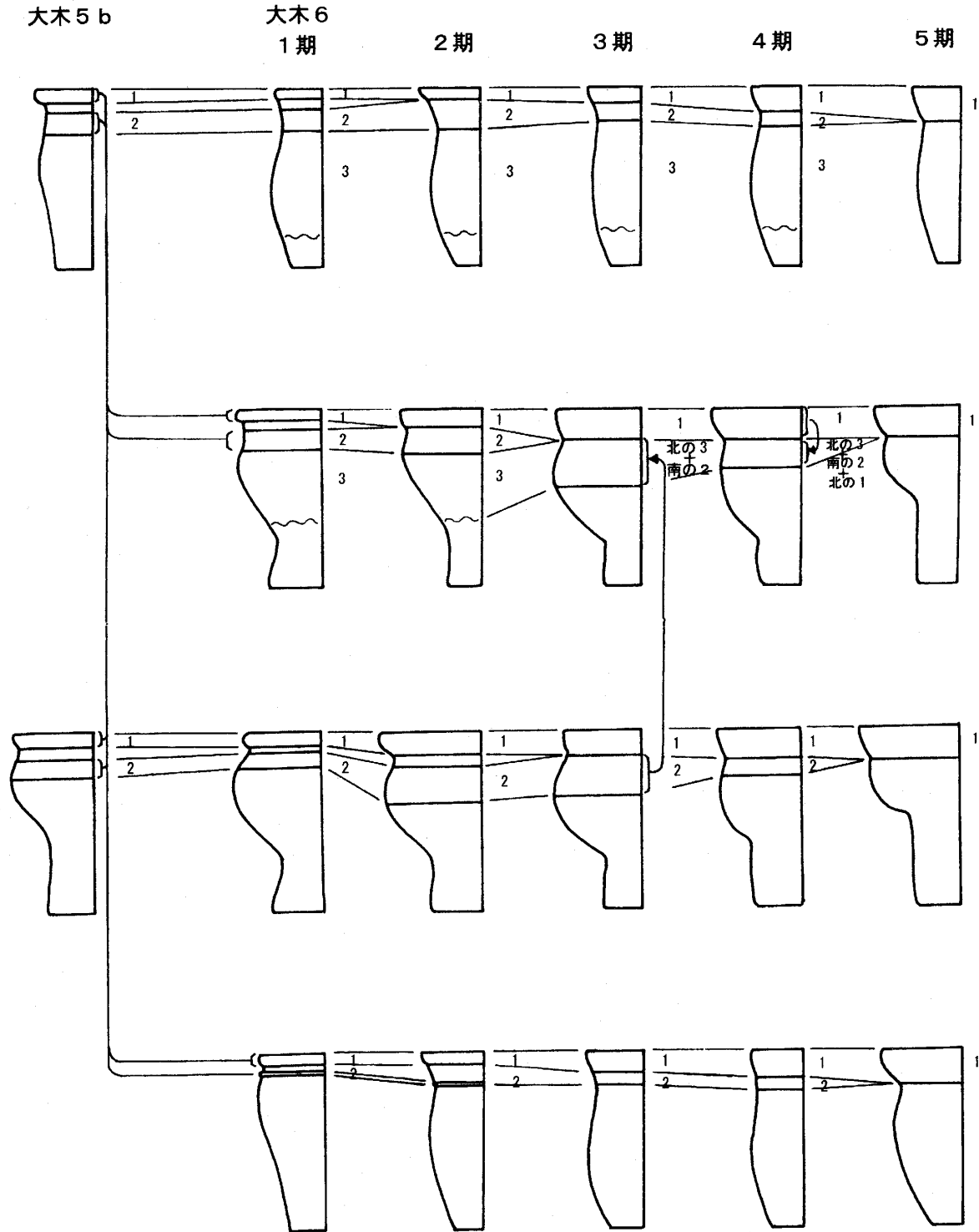


4図 南部の1期

1~6: 福島上ノ原、7: 福島鴨ヶ館、8、福島法正尻、9: 山形大檀、10、11: 福島上道上B (7, 8: 1/5、他1/8)



5図 北部1期の球胴形土器 1~3: 宮城嘉倉 (1/8)



6 図 大木 6 式の器形と文様帯配置の変遷 1 段目：北部の長胴形、2 段目：長胴形文様の球胴形、3 段目：浮線文系球胴形、4 段目：南部の長胴形

ヶ崎町和光²⁰⁾、江刺市新田²¹⁾、宮城県築館町嘉倉貝塚、七ヶ宿町小梁川にも大木6式初期の資料が多い。

北部の長胴形の場合(3図1~3)、大木5b式以来の頸部文様帯を持つものが多く、その下に胴部文様帯が発達し始める。南部の長胴形では先に述べたように頸部に刻み隆起線があるくらいで、ほとんど無文で、先にあげた大檀遺跡例のように(2図1)、この文様帯を持つのは珍しい。長胴形における頸部・胴部文様帯の不振傾向は山形盆地や会津盆地など東北地方南西部で顕著であり、以後南部の長胴形の特徴となるが、口縁部文様帯は北部と軌を一にして発達する。

球胴形についても地域差がある。岩手では長胴形との分化が弱く、それとほぼ同じ文様帯の重畳からなる沈線文で飾られるものが多い(5図)のに対し、南部では(4図)すでに述べたように長胴形より装飾的で浮線文で飾られるものが多く、胴部文様帯はほとんど見られない。

文様帯の話になったところで、その系統関係について説明しておく(6図参照)。本稿で南部(浮線文系)球胴形(3段目)の「胴部文様帯(図中の2)」と呼ぶものは、系統的に大木5b式の「頸部文様帯(2)」を引き継ぐ。これに対し北東北の球胴形(2段目)では大木5b式の頸部文様帯を受け継ぐとともに、その下にまさしく「胴部文様帯(3)」が生まれる。したがってこれら2つの地域の「胴部文様帯」は、系統発生的に異なるものである。しかし、以後北部と南部の球胴形が近似性を強めていき、とくに3期からは両方の文様帯は同じ部分として意識されるようになり、われわれにも区別が困難になる。そのため、大木6式の初めまで遡って、どちらも「胴部文様帯」と同じ名前では呼ばざるをえないのである。

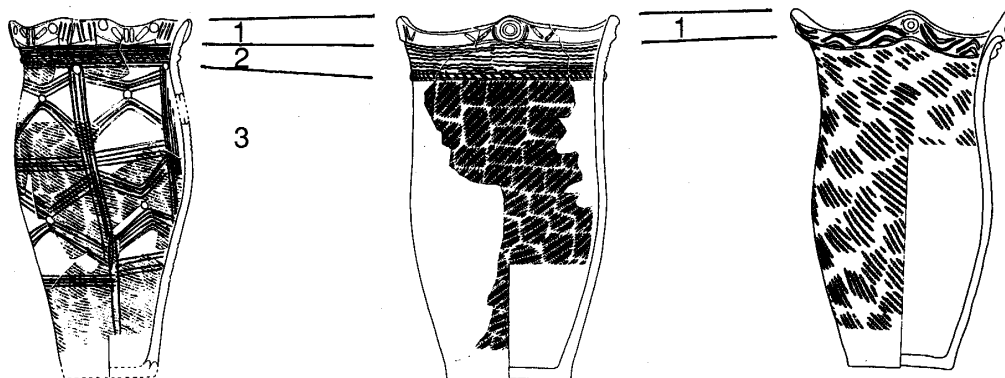
第2章. 長胴形土器の変遷

この章では長胴形の変遷を見る。大木6式には長胴形、球胴形以外にも、胴がまっすぐ立ち上がる直胴形とも呼ぶべき器形があるが、長胴形の変遷に準じて理解できることと、細かい分類は全体の見通しを悪くするので、本稿ではとくに分類を分けない。

長胴形の場合、岩手・宮城など北部で装飾が多く、変化を追跡しやすい。南部では北部と口縁部文様帯を共通にするが胴部文様がふるわない簡略形を基調とし、これに独自の長胴形が伴ったり、部分的に北部とは異なった特徴を示したりするので、まず北部の長胴形を詳しく見た後、南部について補足することにした。

大木6式のうち岩手・宮城北部を中心とする北部の長胴形土器の文様は、口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯の3部分からなる(7図)。すでに述べたように、口縁部文様帯は大木5b式の折り返し部を、頸部文様帯は5b式の頸部文様帯を引き継ぐもので、胴部文様帯は大木6式に入ってから北部で発達した。

個々の土器では、これら3つの文様帯をフルコースで有するもの(7図左)のほかいくつかは



7図 長胴形土器における文様帯の省略 すべて岩手滝ノ沢（縮尺不同）

省略されたものも多い。胴部文様帯を省略して縄文だけにしたもの（7図中）、さらに頸部文様帯も省略して口縁部文様帯だけのもの（7図右）もある。それさえも省略されると粗製土器ということになる。この文様帯の省略は、北部における作り分けとして存在するだけでなく、南北の地域差としても現れる。宮城県南部の小梁川遺跡までは、頸部文様帯・胴部文様帯を有する土器がかなりあるが、山形盆地や会津盆地では、頸部文様帯はある程度見られても胴部文様帯を有するものが少ないのである。南部の球胴形に本来胴部文様帯が無いことと通じる点がある。

時期ごとに3つの文様帯に用いられる文様の種類の対応関係を見るためには、当然フルコースの土器で検討する必要がある。このようなフルコースの土器は大木6式の前半には多いが、しだいに減少し、4期になると頸部文様帯は面影をとどめないほど簡略化し、胴部文様を持つ個体は少なく、5期には胴部文様帯もすっかり見られなくなり、代わりに羽状縄文などの装飾的縄文を用いることが多くなる。よって文様帯の省略は時間的にも進行することになる。

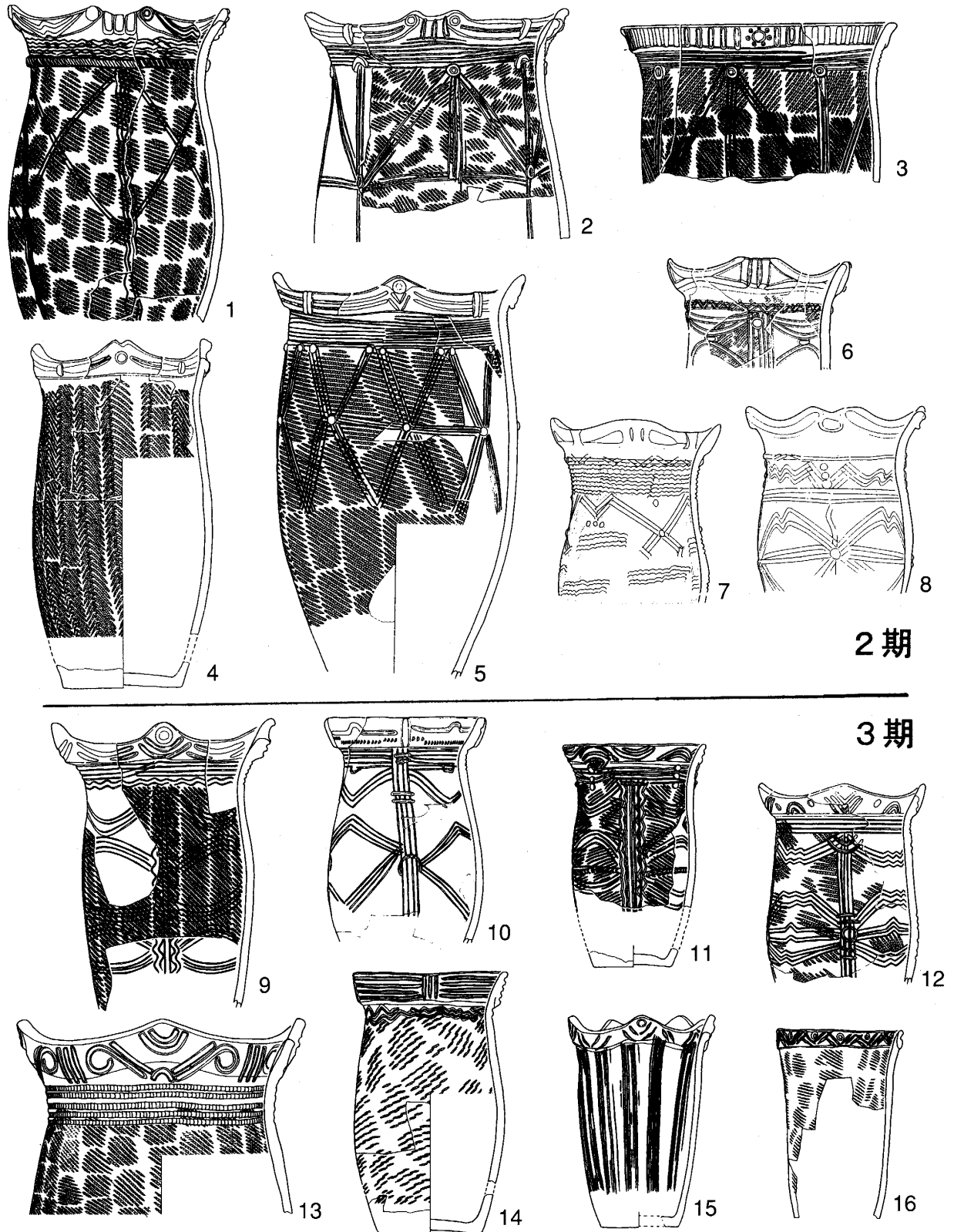
以下北部の長胴形土器について5期に区分し（8図，9図），土器の要素ごとに記すが，これは可能な限り多数の土器について文様の組み合わせを分類した結果得られたものである。

1. 口縁の形

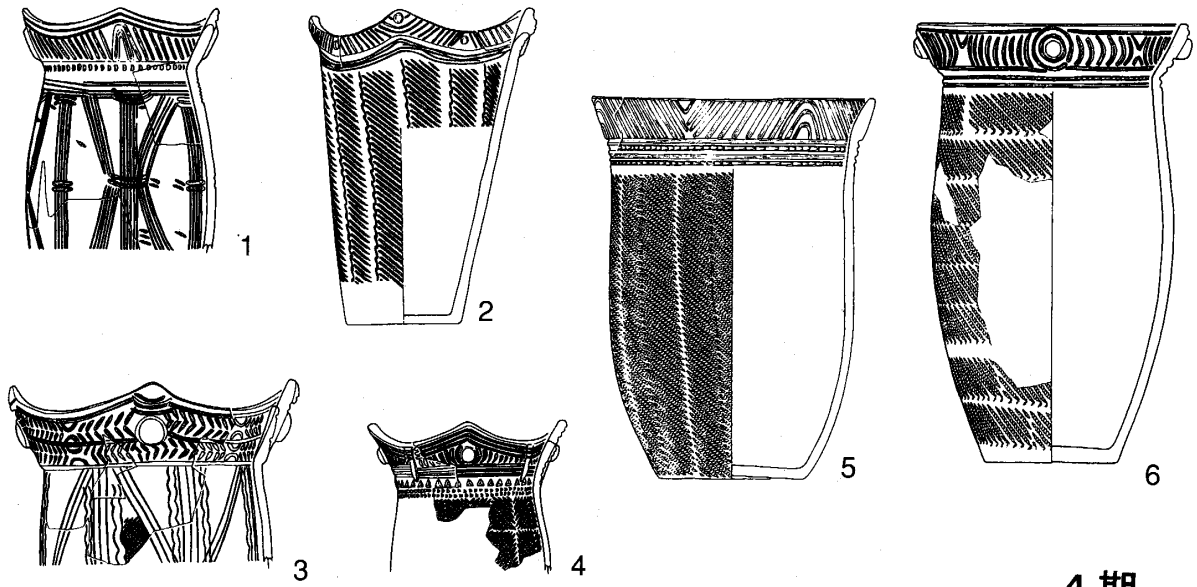
口縁の形には双頭波状，普通の波状，平縁があり，前者ほど文様が豊富で精製の傾向がある。したがって文様帯がフルコースの土器を選ぶと，双頭波状，波状の土器が多くなる。双頭波状の古い例は1期の大檀（2図1）に見られる。大木5b式では5a式の口縁のジグザグ貼付文（1図1）が横長になり，ほぼ口縁を一周するものも出てくるが，とぎれ部を残すものが多い（1図2）。その途切れ部の両端には有孔円形が置かれることが多い（1図5）。大木4式以来のドーナツ形突起が収縮したものである。この2つの円形が近づき，間に刻みが加えられたのが大檀例で，上道上（4図10）では大木6式に普通の双頭波状（8図1，2）に近づいている。大木5b式の折り返し部が1個の有孔円形を挟みこんでつながったものが普通の波状口縁頂部の円文（8図5）になる。

双頭波状は2期に発達し，3期に簡略化した形があるが，4期にはなくなるので，大木6式前半

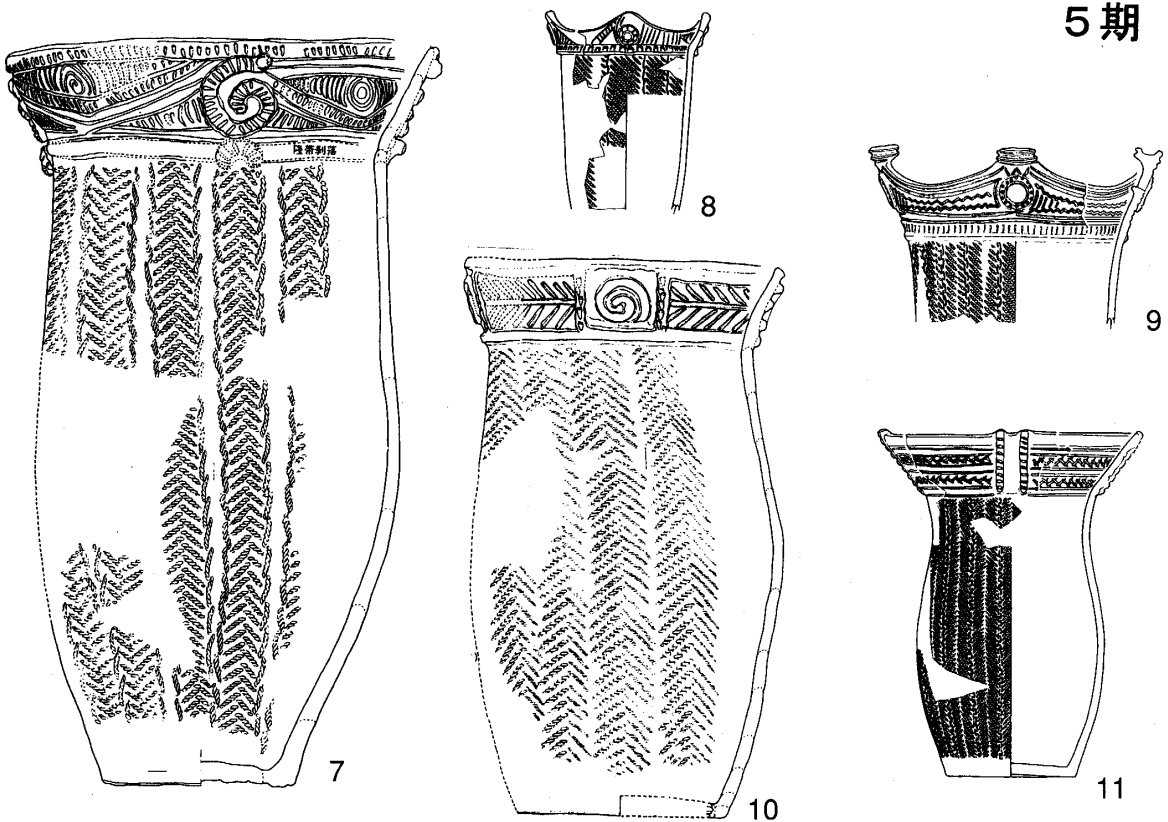
大木6式土器の諸系統と変遷過程



8 図 北部の長胴形土器 (1) 上段 2 期、下段 3 期
 1~5、9~16：岩手滝ノ沢、6~8：宮城嘉倉 (1/8)



4期



5期

9 図 北部の長胴形土器 (2) 上段4期、下段5期
1~6, 8, 9, 11: 岩手滝ノ沢, 7, 10: 岩手鳩岡崎 (1/8)

の分かりやすい指標となる。

2. 口縁部文様帯

大木4式・5a式の口縁に見られるジグザグの貼付文(1図1)は、大木5b式では口縁を一周近くめぐるものが一般的で(1図2, 5), 次に大木6式1期の折り返し部となる。この部分の上下両端に刻みが加えられたものがあるが、いうまでもなく大木5b式のジグザグの名残である。この刻み部分を強調するため、折り返し部の中央に沿って水平に凹ませたものがあり(1図6), 刻みのないものもある。この凹みが2期の特徴である厚みの強い口縁上の太い凹線文になる。

2期では口縁肥厚部は厚く幅狭で、文様は無文、凹円のみの場合もあるが、普通には凹円の間を太い凹線がめぐり、中間で縦の貼付が区切るものが多い(8図2, 4, 5, 7)。

3期にはこの口縁部はしだいに厚みを減じ幅広となり、その上に中太の沈線で複雑化した文様を加えるものが増える(8図9~16)。

4期になると3期で複雑化した文様が単純な形に整理される。円形貼付文を囲むように縦の弧を繰り返す文様(9図4, 6)が特徴的で、弧に替えて斜線や「く」の字形を繰り返すものもある。初めは口唇に沿う沈線がないが、やがて1~3本の沈線が口唇直下を廻るものが現れ、文様帯上限の区画になる(9図1, 3, 4, 6)。この文様は球胴形にも同じように用いられる(12図10~12)。このように長胴形と球胴形の文様の共通化が進行するなかで、それまで南部の球胴形(浮線文系球胴形)に限って用いられていた浮線のジグザグ文が、沈線に置き換えられた形で長胴形にも用いられるようになる(5期の例であるが、9図9, 11)。

5期の口縁部文様は4期と同様に球胴形と共通である。ほとんどの種類の文様が4期からの続きなので微妙な違いで区別しなければならない。4期にはまだ胴部より幾分厚く作られた口縁部が、5期になると胴部とまったく同じ厚さになってしまう。また区別にあたっては、長胴形は手がかりが少ないので、球胴形の4期と5期の器形の明瞭な差(6図)によって区別するのがひとつの方針になる。5期では口縁部文様帯に用いられる沈線が細くなり、さらに本数が増える傾向にある。これは東北地方中期の細線文につながる。また、弧線、斜線などが直線化する傾向にある。口縁部文様を斜めに大きく区分するもの(9図7), 水平に2段, 3段に区分する(9図10)ものも多く、このため縦線は短くなり、点列化したものが生まれ、中期に続く。

鳩岡崎(9図7)では渦巻形貼付文に短沈線の刻みが入り、口縁部文様帯を大きく斜めに区分する帯の中にも短沈線の刻みが入る部分があり、梯子形文様の成立が見られる。梯子形文様の分布の中心は南部にあり、北部では単純化したものが多い。球胴形からの借用である細かい波状線も4期から続いて多く見られ(9図9, 11), これも水平線と交互に加えられたものが多くなる。

口唇外面に隆起線を貼り付けて文様帯上限を区画した個体が増える(9図7, 10, 11)。口縁部文様帯の下限を隆起線で画することが普通になるが(9図7, 8, 10, 11), 1~3期の頸部文様帯中の刻み隆起線は4期に押し引文になっているので、それとは関係なく新しく成立したのであろう。

両方の隆起線を橋状把手でつなぐものが現れる。

5期と中期の糠塚式の初めの部分は非常に連続的であり、細かい特徴の違いで区別しなければならないが、球胴形の場合について第3章で述べる。

3. 頸部文様帯

頸部文様帯は大木5b式から続くものであるが、長胴形では2期に盛んで、3期ではやや衰退し、4期には口縁部文様帯の下限を画する境界線にすぎなくなる。

文様は大木5b式のジグザグ浮線文を沈線文におきかえたもの、水平の平行線、刻み浮線の太くなったもの（刻み隆起線と呼ぶ）の集合からなる。上から順に沈線群、刻み隆起線、沈線群と重ねるのがもっとも丁寧であるが、隆起線下の沈線群を省略したものは普通で、隆起線自体も省略したり、頸部文様帯を全て省略して口縁部文様帯の下にすぐ胴部文様帯が来たりするものもある。頸部文様帯は時間の経過とともに簡略になる傾向があるが、ひとつの時期でもきちんと加えられたものと省略された土器が共存するので（7図）、時期判定の根拠にはなりにくい。

3期にも刻み隆起線、沈線文は継続するが、後者は波状でなく平行線の束になってしまったものが目立つ。隆起線のないものでは頸部文様帯の独立性が薄れ、頸部文様帯は衰退に向かう。

4期の頸部文様帯では刻み隆起線からの変化とみられる竹管外面による押し引き（9図1, 5, 6）が特徴的で、稀に5期にも残る（9図9）。一本の場合が多いが数本重ねるものもある。ほかに平行沈線を重ねるもの（9図2）もあるが、頸部文様帯全体として幅狭なので、口縁部文様帯下限の区画のように見える。5期からこの境界線が隆起線化の傾向を強める（9図7, 8, 10, 11）。

4. 胴部文様帯

胴部文様帯は縄文地の上に半截竹管で平行沈線を加えるもので、各時期を通じて縄文だけのものも多い。1期には斜格子やY字形など単純であり、2期から斜格子や×字形の交点を縦や横に直線の束や波線で結ぶものが現れ（8図1～3, 5）、3期では縦の平行線や縦のジグザグ線が優先して器面を先に分割し、その間を弧線や截頭山形で結ぶものが普通（8図9～12）。截頭山形文の頭もジグザグになるものが多い（8図12）。3期には縦線の上に太い弧状沈線（稀に隆起線）（8図10, 12）を加えるものが特徴的に見られ、4期に続く。

1～3期には大木5b式から続く粘土粒の貼付が胴部文様の基点や交点に見られるが（8図2, 3, 5, 6～8, 11）、すべての個体にあるわけではない。

4期には胴部文様帯を有する土器が激減するが、それを有するものを見ると、沈線を縦方向に引く傾向が強くなり、その間をつなぐ横線はほとんど見られなくなる（9図1, 3）。3期から引き続き太沈線で加えられた弧が見られる（9図1）。

胴部文様の減少は、装飾的な縄文の使用と表裏一体である。装飾的な縄文というのは羽状縄文・結節の回転・木目状撚糸文などで、2期にも少数見られるが、3期には胴部文様帯を省略した土器

にかなり見られるようになり、4期・5期では大部分の土器に用いられる。長胴形では一般に縦方向が多いが、4期には横方向が一時的に増え、5期では大部分が縦方向になって中期初頭に続く。

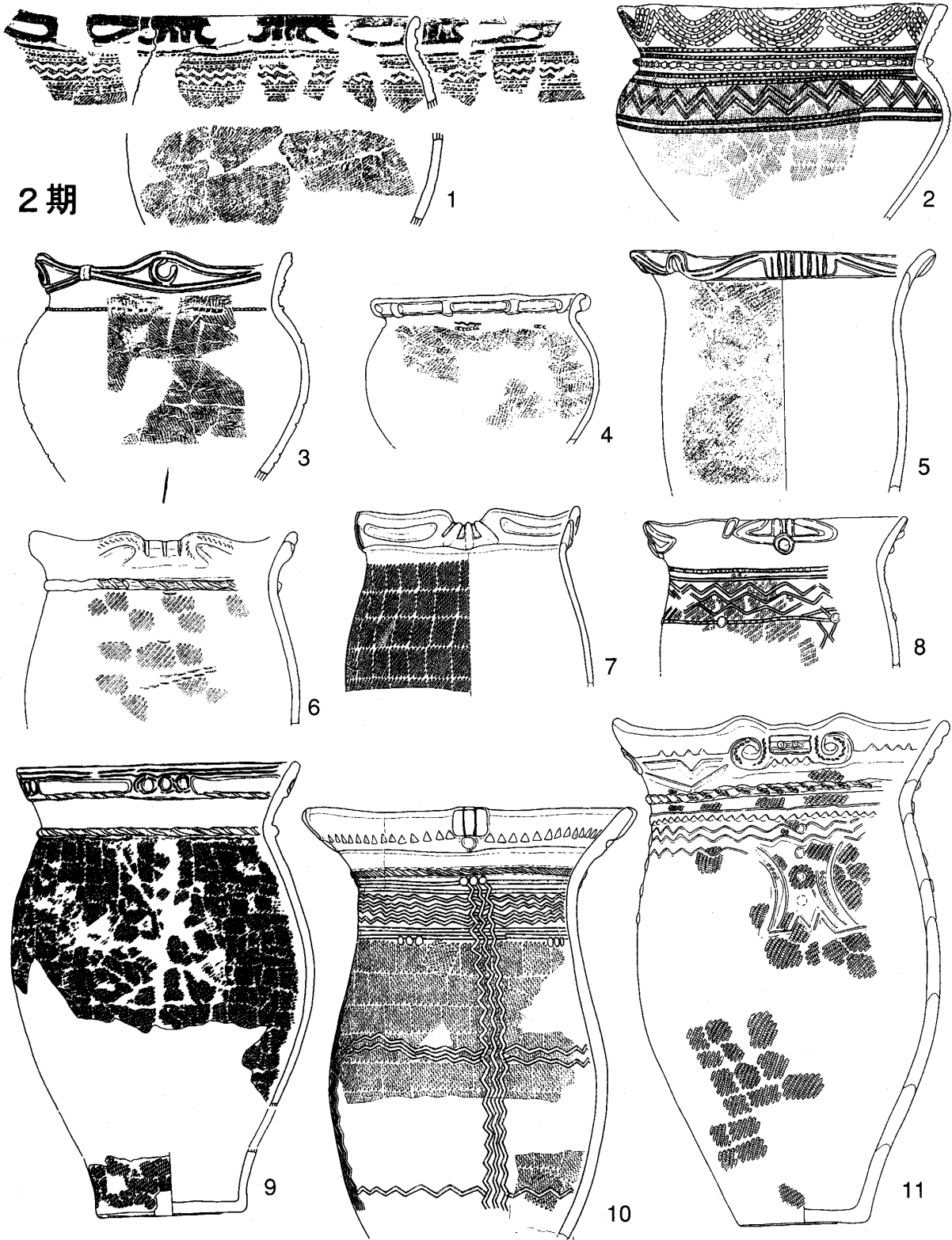
5. 円筒下層式との関係

大木6式の球胴形やそれを模した土器がしばしば東北地方最北部の円筒下層d式に伴うことはよく知られている。逆に円筒下層d式は形の近い大木6式の長胴形に影響し、口縁部文様帯と胴部の装飾的な縄文からなる土器が、時間の経過とともに北のほうから増えていく。大木6式5期には長胴形がほとんどそのようなものになることを上に述べた。一方、円筒下層d式から上層a式への変化で、口縁部文様帯の幅が増し、口縁部が外折したりして器形のうえで胴部と区分されるのは、大木6式の側からの影響であろう。このころから中期初頭にかけて、口縁部文様帯の内容も共通性が高まり、水平線とその間の刺突列、縦の隆起線、湾曲する隆起線、円形や枕形の貼付文、橋状把手、口唇と頸部の隆起線などが両地域の型式に見られる。この現象の経過は、混乱している円筒下層式・上層式の細分型式名の整理をせずに扱うことができないので、概況を述べるに留める。このような大木6式と円筒下層式の親和性は太平洋側の特徴で、日本海側では大木6式の存在が種類・量ともにきわめて限定されている。

6. 南部の長胴形 (10図, 11図)

会津盆地や山形盆地など南部の1期には、北部と異なり、刻みのある浮線・隆起線が頸部を回る以外の文様に乏しい長胴形が分布することをすでに述べた。山形県寒河江市高瀬山 ST1341住居址²²⁾、福島県磐梯町法正尻遺跡²³⁾ SK311号土坑ではこれからやや変化した土器がまとまってある。口唇部の隆帯とその下の隆帯の間を円形の貼付文や数本の隆起線で装飾的に結ぶものなど、口縁部が複雑化している。上ノ原や上道上にはそのようなものがないので時期差を示すのであろう。このような口縁部文様の複雑化は、北部における変化と軌を一にし、同時性を示すものと考え、2期とする。10図1, 2, 8などの頸部文様は大木5b式以来のもので、北部の2期と一定の類似性を保つ。南部の2期には口縁から底部まで揃う資料が少なく、球胴形と長胴形の分化の状況が判断しにくい。長胴形でありながら胴部の膨らみが強く、どちらとも言いにくい形が北部より多いような気がする。

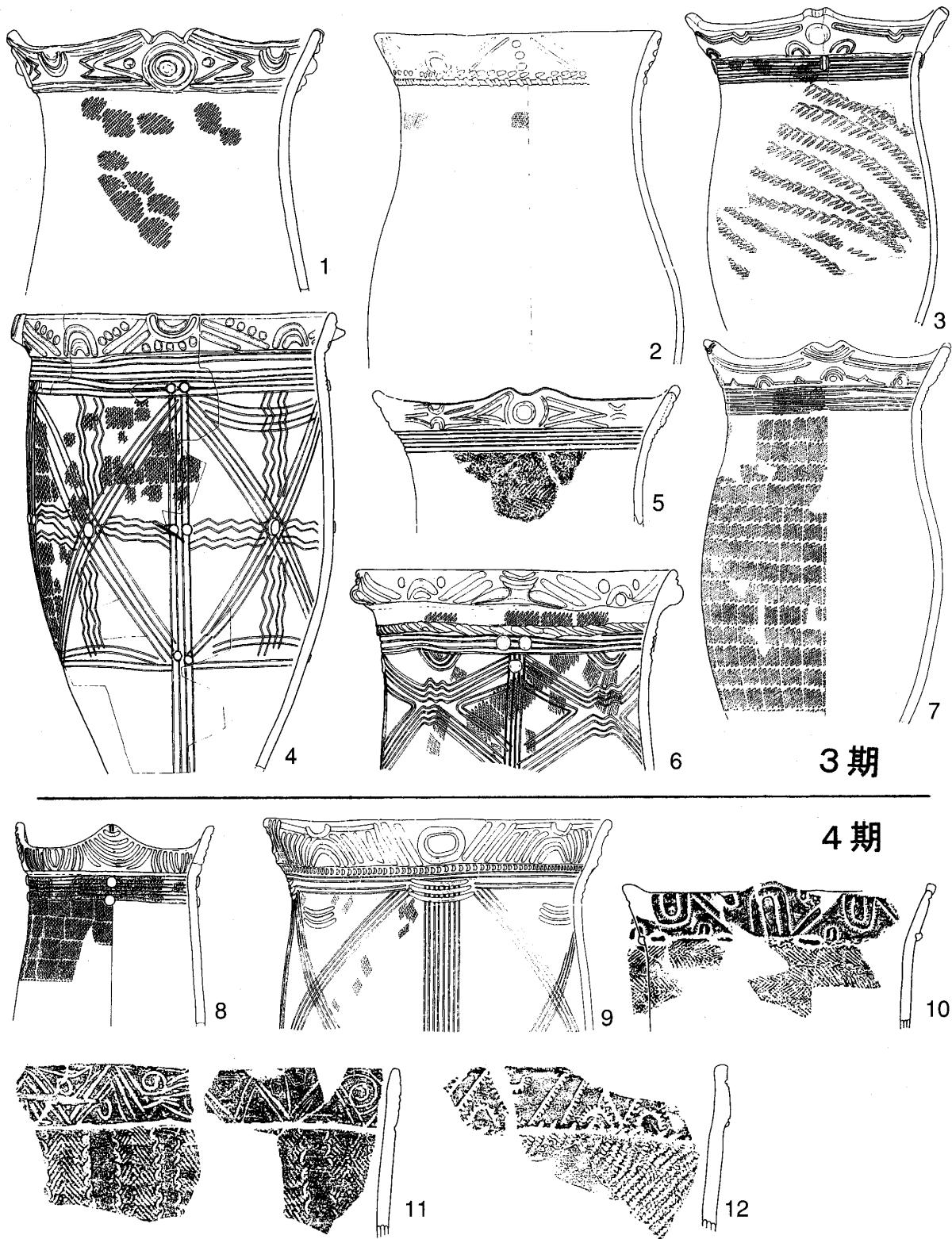
南部の2期には北部と異なるいくつかの特徴が指摘できる。南部の1期には口縁の肥厚帯上または2～3本の隆起線の間につまみ状の縦長突起が見られたが(4図6, 9, 11)、これが双頭波状口縁の間に挟まって数本並列し、立体的な装飾を構成する(10図6, 7, 11)。他にもいろいろな形があり、文章では表しにくい(10図3～11)。要は、北部では幅広の折り返し口縁上の太い凹線が文様変化の元になったのに対し、南ではこれに替わる2～3本の隆起線が変化の元になったため、北部よりも立体的な口縁部文様の発達が見られるのである。またこのような隆起線の中心線に沿って撚糸を押し付けたもの(10図5, 6, 11)が山形と会津に特徴的に見られる。また南部では折り



10図 南部の長胴形土器 (1) 2期

1, 3: 福島法正尻、2, 7, 10: 宮城小梁川、4, 5, 6, 8, 11: 山形高瀬山、9: 福島鹿島 (1/8)

大木6式土器の諸系統と変遷過程



11図 南部の長胴形土器(2) 上段3期、下段4期

1, 5 : 山形高瀬山、2~4, 6~9 : 宮城小梁川、10~12 : 福島法正尻 (1~10 : 1/8, 11, 12 : 1/5)

返し口縁の下端に刻みを加えただけの土器（10図10の頸部・胴部文様を省略したようなもの）が多く見られる。

このような2期の土器とそれから少し変化したものは新潟県巻町の豊原²⁴⁾・南赤坂など²⁵⁾にも見られ、この時期には会津方面の大木6式が新潟北半に広がっていたとみられる。同時期の鍋屋町系は豊原にわずかに見られるにすぎない。

3期（11図1～7）、4期（11図8、9）にも南部では北部と同様の口縁部文様を有するが、胴部文様を欠く土器が多い。胴部文様は宮城県南部までかなり見られる。4期ころと思われる土器に、円筒形で口縁に浮線文系球胴形と類似の文様を有し、胴部は縄文だけになる円筒形の土器がある（11図10～12）。これは従来の長胴形とは形制が大きく異なるので、由来がはっきりしないが、4期、5期に球胴形と長胴形が統一され、文様の区別がなくなる現象のさきがけをなす。5期は北部がそうであるように南部でも長胴形と球胴形で使用される文様の区別がなくなり、胴部が球形に膨らむかどうかだけの区別になり（そのため南部5期の長胴形は、15図で球胴形と一緒に図示した。）、その膨らみの程度も減退していくことは次章で述べる。むしろ北部と南部の地域的な違いのほうが顕著である。

第3章. 球胴形土器の変遷

球胴形土器は2つの系統に分けて変化の過程を理解する必要がある。第1章で長胴形・球胴形を合わせて南部における大木5b式から6式への変化を見たが、第1の系統はこれに発するもので、大木5b式の頸部文様帯の流れを引く文様帯が胴部に幅を広げていくものである（6図3段目）。下限を水平に区画することが明確な特徴で、大木5b式以来の浮線文を多く用いる傾向があるので「浮線文系球胴形」と呼ぶ。ただし系統名であって、浮線文だけが用いられるという意味ではない。大木6式の中でもっとも精製の土器であり、本章4節で見ると、中部日本の土器と共通要素を有するようになり、進出力・土器情報の伝達力が強い系統である。

第2の系統は岩手県を中心に分布するもので、北部の長胴形土器を上下に圧縮した形で、長胴形と共通する口縁部・頸部・胴部の文様帯を有する（6図2段目）。器形は球胴形であっても、文様は長胴形とほとんど共通するのである。このため長胴形との時間的対比が容易にできる。「長胴系文様の球胴形」と呼びたい。

先にも触れたが、これら2つの系統の土器の文様帯の関係についてもう1度注意しておきたい。第1の系統（6図3段目）のくびれの下に位置する文様帯（2）は、大木5b式の頸部文様帯に起源する。一方第2の系統（6図2段目）の胴部に位置する文様帯（3）は、大木5b式の頸部文様帯（2）の下に新しく生まれたものである。よって両者は本来系統発生的に異なる文様帯であるが、当時の人々は球胴形のほぼ同じ位置にある文様帯を同じものとして意識するようになったようで、

両者折衷の文様を有する文様帯も生まれ、区別がなくなっていく（北の3+南の2）。このため第1の系統の文様帯名を「頸部文様帯」ではなく、第2の系統の文様帯名に合わせて「胴部文様帯」と呼ぶ。中間的折衷的な土器は第3の系統と呼ぶべきものであるが、記述が煩雑になるので第1の系統に含めておきたい。

以下の記述では、すでに説明した北部の長胴形土器の分期を基本におき、それに長胴系文様の球胴形の分期を対応させ、さらにそれに浮線文系球胴形土器の分期を対比させる（本章3節）という順序で考える。

1. 長胴系文様の球胴形土器（12図，13図）

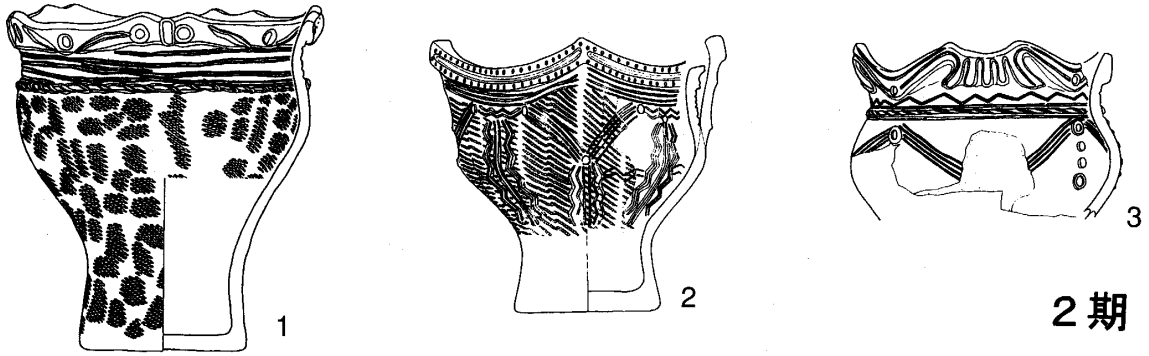
岩手県を中心とする「長胴系文様の球胴形土器」では、口縁部文様帯、胴部文様帯が、3期を除き長胴形とほぼ同じ変遷をたどるので、長胴形と球胴形の時間的対比が容易である。以下の2～5期は、これによって長胴形と対比させた分期である。

器形の変化（6図2段目）

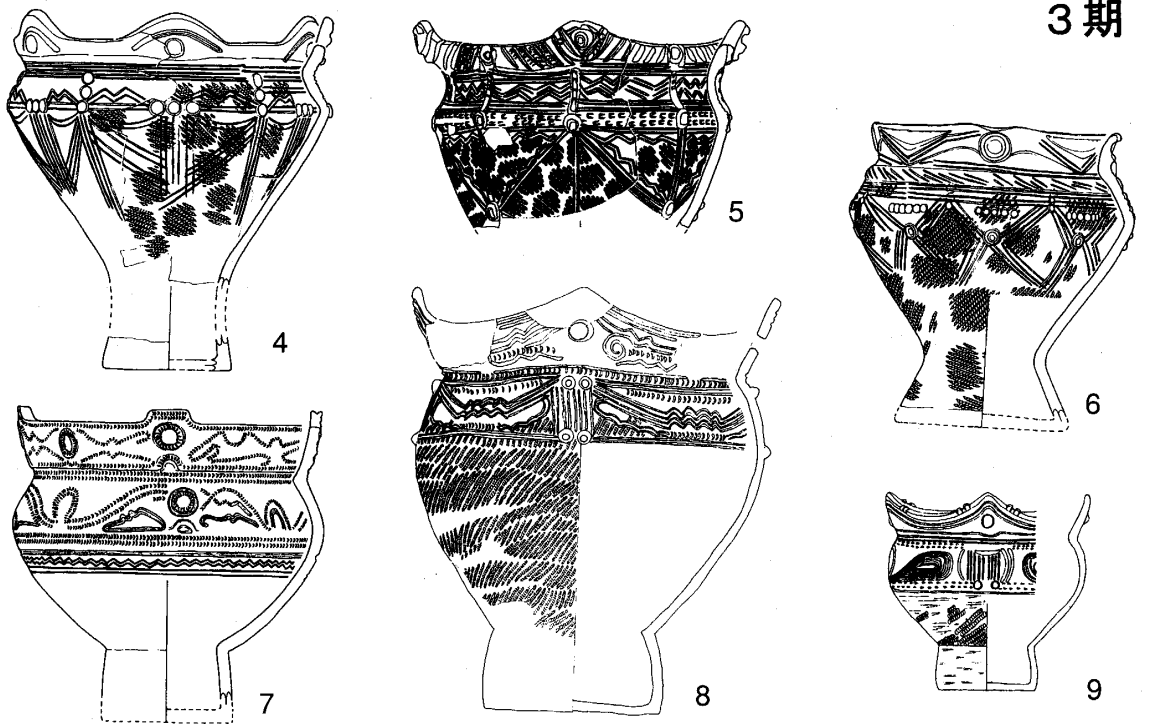
1期は底部近くで急に縮約する形が見られ、長胴形と区別される。2期にも胴下部が縮約したのち底部に向かって再び開くものが多く、まだ球胴形という表現がなじみにくい形（12図1，2）である。この形は3期まで残る（12図4～6）ようであるが、そのころ南部から浮線文系球胴形が広がってくるようで、器形もそれと共通するものが増え、胴部は大きく球状に膨らみ、下を小さな脚台状の部分が支える典型的な球胴形になる（12図7～9）。4期に入ると球胴部がやや縮まり、胴径が口縁より少し小さくなるとともに、それまで直角に近く折れ曲がっていた脚台部とのつながりが滑らかになる（12図10～12，13図3，4）。5期では器形の変化が大きい。球胴部はさらに収縮し、脚台部が高く太くなる結果、球胴を脚台が支えるというより、胴の中位が膨らむという表現が適切な形になる（13図6～11）。球胴部がさらに収縮した形が、東北地方から関東地方（五領ヶ台I a式）まで中期初頭に広く見られる特徴的な器形である。

文様帯の配置（6図2段目）

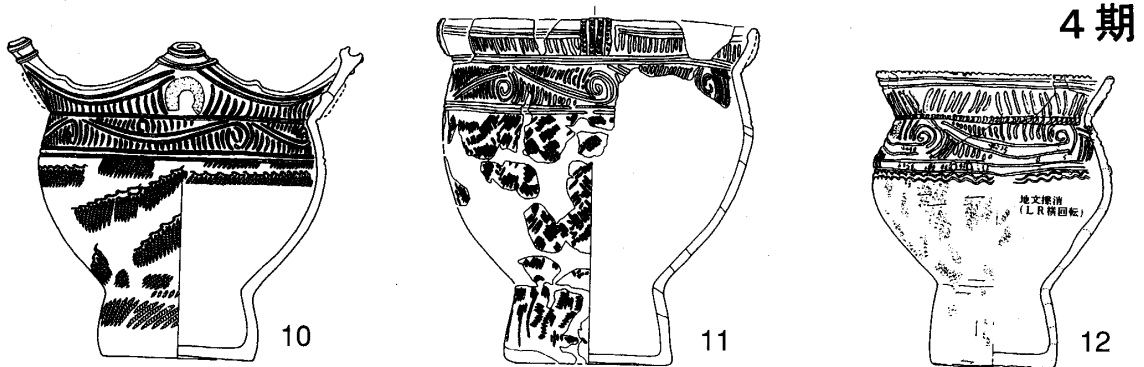
「長胴系文様の球胴形」は本来、口縁部文様帯・幅の狭い頸部文様帯・胴部文様帯の3つが重なり、頸部文様帯の下に刻み隆起線があることが多く、胴部文様帯の幅が広く、その下限が水平に区画されないことなど、みな長胴形と共通する（12図1～6）。3期に大きな変化がある。頸部文様帯が無く、胴部文様帯の下限が水平に区画されたものが増える（12図7～9）。南部から浮線文系球胴形の影響が及んだのである。口縁部文様もそれまでと違って長胴形とは異なるものが多くなる。4期にはほとんどすべての球胴形において胴部文様帯下限が水平に区画される（12図10～12，13図1～5）のは、浮線文系球胴形の文様帯の方式に従うわけで、もはや本来の長胴系文様の球胴形は途絶え、折衷型が支配的になると言ってよい。また4期になると球胴形と長胴形で用いる口縁部文様が統一される。浮線文系球胴形のシグザグ文（13図1，3，5）が北部の長胴形にも用いられ、北部の長胴形に発する弧を重ねる文様が北部の球胴形に用いられる（12図10～12）。球胴形と長胴



2期



3期

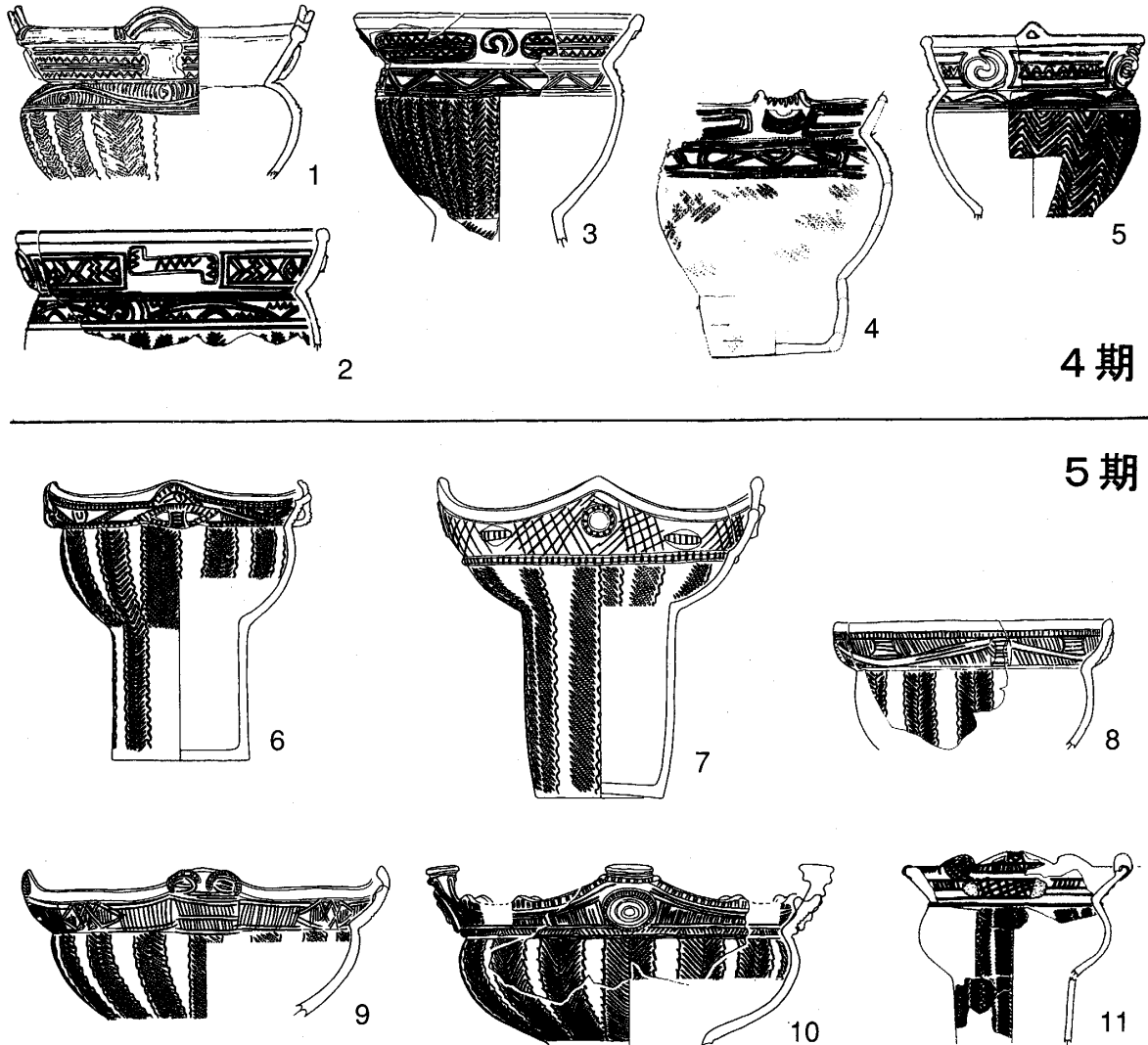


4期

12図 北部の球胴形土器 (1) 上段2期、中段3期、下段4期

1~4, 6, 7, 10: 岩手滝ノ沢、5: 岩手樺山、8: 岩手大館、9: 岩手浅野、
11: 岩手塩ヶ森、12: 岩手鳩岡崎 (1/8)

大木6式土器の諸系統と変遷過程



13図 北部の球胴形土器 (2) 上段4期、下段5期
 2, 3, 5~9, 11: 岩手滝ノ沢、1: 岩手清水、4: 岩手鳩岡崎、
 10: 岩手樺山 (1/8)

形の口縁部に用いられる文様が共通になった結果、1期~2期とは別の形で球胴形と長胴形の類似性が再生する。

3期から5期へと口縁部文様帯の幅が広がる方向で変化し、これに従うように胴部文様帯は4期には幅が狭まり、5期にはほとんど見られなくなる。そしてこれに替わって、4期から縦の羽状縄文が増え、5期にはほとんどの個体に使われる。5期には、使われる文様の共通性に加え、口縁部文様+胴部縄文という文様帯配置まで球胴形と長胴形の区別がなくなり、球胴形主導の形で再び融合するわけである。

口縁部文様帯

1期については第1章で触れた。2期は厚みが強く、上に太い線で文様を加えられる (12図1~

3)。この口縁部は3期では厚みが弱まり、上下の幅が広がり、それまでより複雑な文様を加えられるようになる(12図4～6)。しかしこの時期に多いのは南部から広がった浮線文系球胴形(浮線文系といっても北部で使われるのはほとんど沈線文)で、別の系統の文様を有する(12図7～9)。4期には再び長胴形と共通の文様が一般的になる。それは沈線の弧をくりかえす文様が多く(12図10～12)、3期に北上した浮線文系球胴形のジグザグ文もあり(13図1, 3, 5)、このようなものは土器全体として南部のものと違いがないので、ここに提示した(13図2～5)理由は、北部の遺跡で出土したという点だけである。

5期には、4期の縦の弧から変化した縦の平行線(13図8)、ジグザグがあり、ジグザグ沈線と水平線を交代に加えたり、縦の平行線と水平線を交互に加えたりするなど変化に富む。半截竹管を施文具として、縦の平行線を密接して加えるもの(13図9, 10)は、南部にも点々と見られるが、大木6式内部における平行線化、細線化の傾向に加え、後述するように中部高地の松原式から来る要素が関係すると考えられる。中期に続く梯子形図形(13図6)やドーナツ形貼付文に刻みを入れること(13図10)は南部と共通し、南部の梯子形沈線文を単純化したものも見られる。長胴形と同様に口縁部文様の下限を画する隆起線の出現(13図6, 7, 10)は、このようなさまざまな文様の違いを超えて当てはまる第5期の指標となり、中期にさらに発達する。

このように1期、2期と4期、5期は口縁部文様の共通性から北部の球胴形と長胴形を容易に対比することができるが、3期については共通でない文様が多い。しかし2期と4期には含まれる位置であるから、3期についても無理なく対比が可能である。

頸部文様帯

長胴形と共通性の高い1期～3期に頸部文様帯(6図の2部分)があり(12図1～6)、多くの個体に刻み隆起線があるが(12図1, 3, 5, 6)、文様帯全体の幅(高さ)は長胴形より狭く、文様も単純である。3期には浮線文系球胴形が広がり、頸部文様帯をもつ土器(12図4～6)は減少する。

胴部文様帯

2期には同時期の長胴形の胴部文様を上下に圧縮したような文様が多い。3期にもこの文様は残るが、多くは北上してきた浮線文系球胴形によって置き換えられたり、両者の中間的なもの(12図8)になったりする。4期の口縁部文様は長胴形と共通するものが多いが、球胴形ではそれとほぼ同じ文様が胴部にも転移し、くりかえして加えられる(12図10～12)。ただしここで注意すべきは、胴部文様帯の下限が水平に画される点で浮線文系の流儀に従い、文様の形も(渦巻きから伸びる無文の帯が画面を斜めに区切り、それによってできた三角形内に円文や渦巻を置く)浮線文系の胴部文様の基本を受け継いでいる。よって4期の北部の球胴形は全体として、北部の伝統の球胴形と南部の伝統の球胴形の折衷という形なのである。

5期には胴部文様を有する土器はほとんどなくなり縦の羽状縄文が配され、中期に続く。

2. 浮線文系球胴形土器の変遷 (14図, 15図)

浮線文系球胴形は大木5b式のうちでは文様にもっとも手の込んだ浮線文の土器を起源とする。南部の大木6式1期は土器群全体としては文様が少ないながら、球胴形に変わっていく種類の土器では、浮線文の使用頻度が高い。浮線文系の球胴形が南部に多く、北部へ行くほど少なくなるのはそのような成立地域の中心と関係があり、また本章4節で述べるように、北陸との関係も影響している。

上で長胴形と、長胴系文様の球胴形土器について要素ごとに項目を分けて変遷を記したが、浮線文系球胴形は、各要素の連続性が強く、要素ごとに明確に時期区分することが難しいので、以下要素別に項目を分けずに変遷を記す。

浮線文が用いられるのは、1期～3期では球胴形に限られるが、球胴形と長胴形の区別が薄れるにつれ5期には長胴形でも普通に用いられるようになる。

1期

第1章でこの種の土器の成立について触れた。1期は浮線文系の球胴形（南部に分布の中心がある）とその地域の長胴形が未分化であるため、ここで独自に書くべきことは少ない。口縁部文様帯は未発達で、頸部のくびれの下に浮線文からなる幅の狭い文様帯がある。大木5b式の浮線文は浮線の上を縦に刻んだり刺突したりするのが普通であるが、この時期から半截竹管を押し引きした結節浮線文に類似していく。十三菩提式の浮線文に類似するが、それが起源というわけではない。法正尻遺跡4図8の胴部文様は、大きな弧の内側に半円形が出っ張り（この部分が次に渦巻きなどになる）、その後の浮線文系球胴形胴部文様の基本形を示す。

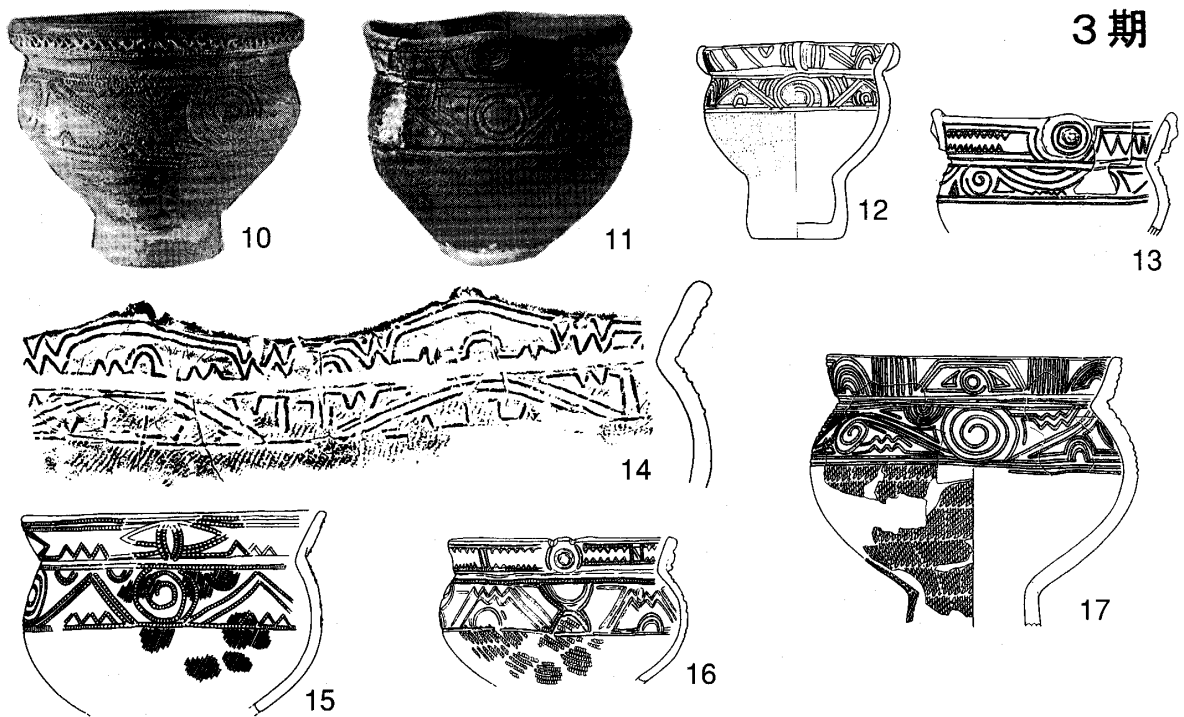
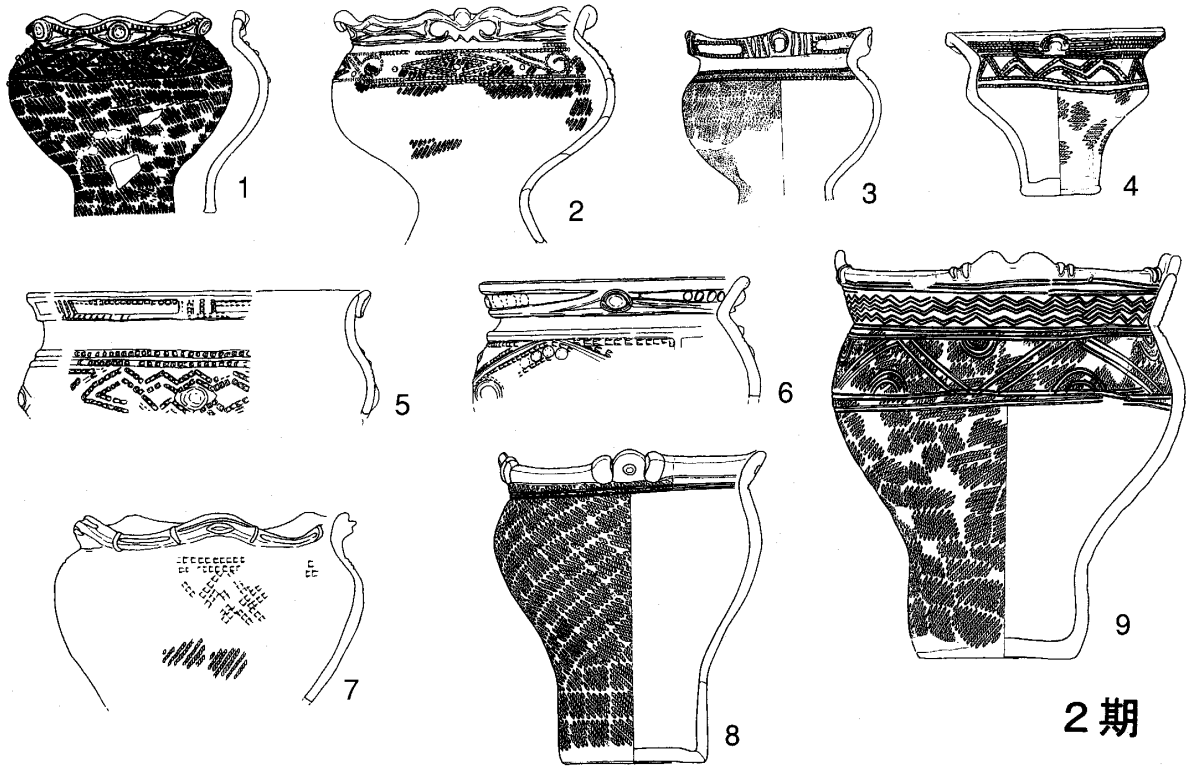
2期 (14図1～9)

この時期にも南部では球胴形と長胴形の分化が不明瞭で、底部まで残らない破片ではどちらか区別しにくいものが多い。よって2期についても先に述べた（2章6節）南部の長胴形の説明があてはまる。すなわち口縁部文様帯の発達傾向を主たる理由として2期とするのである。

器形は北部のものに似て、底部近くが縮約して再び開くものと、胴部から円筒状の脚台状部への移行がゆるやかであるもの（14図4, 8, 9）があり、後者の円筒状の部分は3期に続く。14図1, 2, 5では結節浮線文が用いられ、文様が発達する傾向が見られる。

3期 (14図10～17)

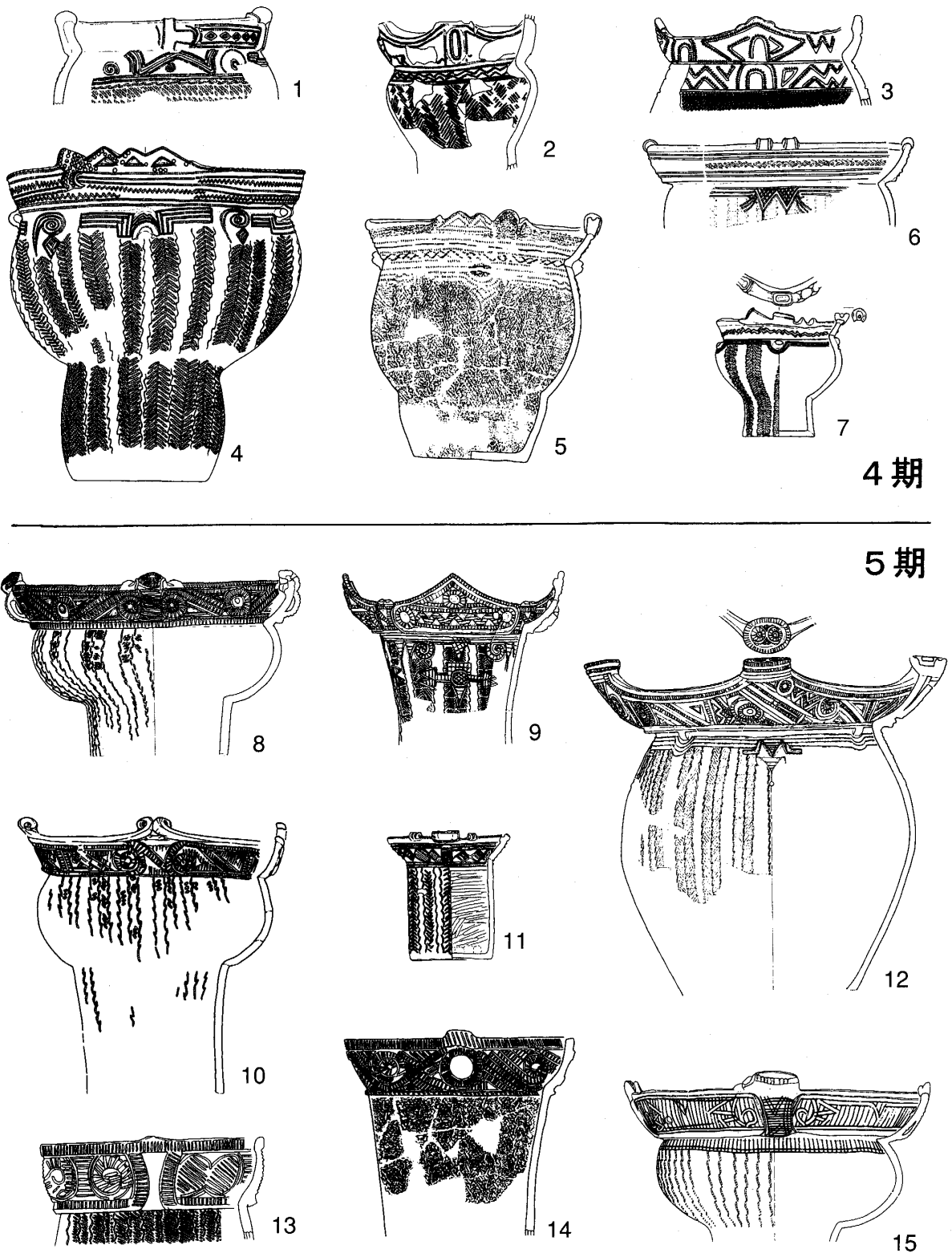
別稿で詳しく記述したように²⁶⁾山形県吹浦遺跡²⁷⁾では、この遺跡の古段階と新段階（土器編年の段階ではなく、この遺跡に固有な土器組成の大きな状況の変化）に、大木6式といえるものが少なく、中段階にのみ一定量の球胴形土器がともなう（14図10, 11）。この球胴形は多くが類似の器形・類似の文様で1つの時期に属すると見られる。器形は2期の後半に書いたものから胴部がさらに丸く膨らんだもので、球胴部から台状部へ直角に近く折れ曲がる形である。口縁の幅が広がり、その上の文様が発達する。胴部文様帯の幅も広がりが見られ、下限は胴径最大部付近に達するものが多い。文様は主に結節浮線文からなり、線の間には余裕の空間がある配置である。結節浮線文を結節沈



14図 浮線文系球胴形土器 (1) 上段2期、下段3期

1: 福島鹿島、2, 5~7, 15, 16: 山形高瀬山、3, 4, 8, 9, 17: 宮城小梁川、
10, 11: 山形吹浦、12: 宮城嘉倉、13: 福島法正尻、14: 宮城長根 (11, 12: 不定、他1/8)

大木6式土器の諸系統と変遷過程



15図 浮線文系球胴形土器 (2) 上段4期、下段5期

1: 宮城小梁川、2: 福島地蔵原、3: 福島法正尻、4: 山形吹浦、5: 秋田岱Ⅱ、6: 宮城嘉倉、
7, 8, 9, 12, 15: 宮城小梁川、10: 福島愛宕原、11: 福島関林、13, 14: 福島法正尻 (1/8)

線文やただの平行沈線に置き換えた土器も少なくない。

3期・4期・5期の変化の傾向

- この3つの時期はきわめて漸位的に変化し、分期しにくい、ほぼ次のような傾向で変化する。
- ・使用される浮線文が、結節浮線文 → 結節浮線文とソーメン状浮線文の併用 → ソーメン状浮線文の順でほぼ移り変わる
 - ・浮線文によるモチーフのうち、大きなジグザグ → ジグザグの小型化と端重ねジグザグ → 梯子形、とほぼ入れ替わる。
 - ・口縁部文様帯の拡大傾向とそれに対応する胴部文様帯の収縮と消滅。3期は胴部文様帯の幅が広く、4期で狭くなり、帯をなさない懸垂文になるものもあり、5期では懸垂文が少し残るだけである。
 - ・内外に突出のない口縁 → 口唇部が肥厚突出したものが増える。これは中部日本の影響をこの種の球胴形が受け入れた結果とみられる。
 - ・横方向回転の縄文 → 縦方向回転の縄文。新潟県南赤坂遺跡の浮線文系球胴形には3期末に置きたい様相の土器が多く、ほとんどすべて横方向回転である。

4期 (15図1～7)

13図上段は北部に進出した浮線文系球胴形としてここに図示したが、浮線文系球胴形であることに変わりはなく、15図上段に入れてもよいものである。13図上段で示したものは4期でも古い様相のものが多く、15図4～7は4期でも新しい様相のものである。後者では胴部文様が帯をなさない懸垂文になっており、ジグザグは短い浮線の端と端を重ねるようにしたものが特徴的である。

4期には口唇が内外に突出した断面を有するものが多い。新しい特徴である。羽状縄文を横に配した土器もあるが、縦に配したものが大部分となる。

5期 (15図8～15)

球胴形と長胴形の文様上の区別がほとんどなくなる点は北部と同様であるが、北部と南部で使われる文様はかなり異なることは続く。球胴形は器形において球胴部分が収縮し、台状部が太く高くなるため、球胴形というより口縁部の下が膨らむという表現があてはまる。これがさらに収縮したものが中期最初頭に典型的な器形であることは、長胴系文様の球胴形の節でも述べた。口唇の断面形が内外に突出するものが多いことは4期と同じであるが、さらに複雑になって内側では階段のように1段低い位置から突出するものが見られる(15図8, 9, 11)。これも中期最初頭に続く。括れ部の直上、口縁部文様帯の下限をわずかな隆起線で画するものが多い。大きな橋状把手が多く用いられる。

この系統は「浮線文系」と一括して呼んでいるが、文様には浮線によるものと沈線によるものがある。5期には浮線を2本平行に貼り付けて文様を描き、その2本を短い浮線で梯子形につなぐ文様が特徴的に現れる(15図9, 11, 12)。この文様を沈線文で置き換えたものもある(15図8, 10, 13, 14)。中期初頭には浮線文のものがなくなるので、浮線文を持つ個体を大木6式5期と判断す

るのは容易であるが、沈線文のものがこの時期から中期まで続くので、沈線文の個体については前期末と中期初頭の判別が容易でない。要は浮線文を沈線に置き換えたのが前期の段階なので、沈線を用いていても、浮線文という手法的制約から結果する文様の硬直感のあるもの(15図8が典型的)が前期末である。前期末には太く上が平らな隆起線で文様帯内部を区分し、その隆起線の上を短線で刻むものがあるが(15図10, 13, 14)、中期初頭になるとそのような隆起線部分がなくなり、橋状把手以外の部分が平面化する。

前期終末と中期最初頭の沈線文土器の区別については、遙かに離れた南関東の例になるが、横浜市霧ヶ丘遺跡第2地点が中期初頭を含まない資料なので、前期末の範囲の認定に役立つ。

15図15も5期に属するであろう。北部も含め(13図9, 10)類例は点々と出土している²⁸⁾。この種の土器は宮城県嘉倉貝塚SI320住居跡に4期末に遡りそうな関連資料があり、それは群馬県中尾遺跡²⁹⁾の類例を介して、中部高地の松原式³⁰⁾につながる。この種の文様の祖形が東北地方にないこと、松原式(大木6式4期並行)と15図15例などのある時間差からも、中部日本からの伝播が認められる。

15図の5期には球胴形以外の器形も一緒に示した。器形以外の要素がほとんど共通することがわかるであろう。

3. 浮線文系球胴形と長胴系文様の球胴形の時期的対比

以上の分期名称は長胴系文様の球胴形の分期に合わせて命名したものであるから、ここで対比の理由を述べるのは前後が逆になるのであるが、対比のポイントをあげると、1期, 2期における両者の間の広くさまざまな共通性, 3期における両者の器形・文様帯配置や文様帯幅, 文様の近似性, 4期, 5期における器形の共通性や球胴・長胴の融合現象である。次章で述べるように、1期, 3期, 5期はそれぞれ関東の十三菩提式古段階, 中段階, 新段階末に高い確実性をもって対比できるから、大木6式細分各期と中部日本の対応関係は相当な信頼がおけるはずである。

4. 浮線文系球胴形と中部日本の土器の共通要素

上に変化の過程を述べた浮線文系球胴形土器は、さまざまな点で十三菩提式や真脇式と共通の要素を有し、それらと一定の共通性を保持しながら変化する点で、大木6式中でも特殊な系統である。以下その共通要素を列挙する。

1) 球胴形という大木6式の特徴と考えられている器形が、大木5b式から6式にかけて深鉢の底部近くが縮約して生まれてくることを上に見た。典型的な球胴形は球形の胴部を小さな円筒形の台形部分が支える形をとるもので、東北地方では大木6式3期ころから見られる。ところがそのようなまさに球胴形と呼ぶべき器形は、数こそ少ないが中部・関東においては、十三菩提式古段階前半(大木6式1期並行)に遡って見られる。東北地方における出現よりわずかに早い。西日本で並行する北白川下層Ⅲ式や続く大歳山式にも底部が縮約する器形は少なくない。大木6式の典型

的な球胴形が中部日本と共通要素を有する浮線文系球胴形として現れることについて、中部・関東からの影響を考えてみる必要がある。

2) 上記のような古段階の十三菩提式土器には胴部に橋状把手が見られ、古段階後半には口縁部に移動する。大木6式の球胴形では1期から橋状把手が見られるので、ほとんど同時である。同じころに同じような把手が現れるのは無関係ではないであろう。大木6式の橋状把手は以後球胴形土器にしばしば用いられ、中期まで続く。十三菩提式新段階後半に関東で再出現する橋状把手は、これが再び南下したものである。

3) 浮線文系球胴形に限って見られる(5期には球胴形と文様の区別がなくなる長胴形にも見られる)特徴に、口唇の外側(または内外両面)の狭い部分が無文で肥厚するものがある。これは中部日本の十三菩提式池田系³¹⁾に特徴的に見られる、口唇外側の一定の幅を肥厚させた無文部と関連するものであろう。本章2節の終わりで触れた中部日本からの松原式の文様の広がりに関係するように思われる。

4) 十三菩提式・真脇式・大木6式の口縁部に見られるドーナツ形や渦巻形の貼付文は、大木6式では2期から、十三菩提式では中段階から見られ、類似の形になる。

大木6式の浮線文は大木5b式の刻みのある浮線文から来る。また中部日本の結節浮線文は西日本から侵入(よって「北白川系」と呼ぶ)したものであるから、両者の系統的由来は異なる。しかしやがて両者は結節浮線文という共通の形に統一された後、結節浮線文主体からソーメン状浮線文主体の方向で軌を一にして変化する。ジグザグ浮線文の細密化の動きも共通する。

大木6式浮線文系球胴形の胴部文様についてもやはり大木5b式から変化したものと認められるが、3期ころからその中に見られる渦巻き文や同心円文が十三菩提式・真脇式のそれとかなり類似していく。このように浮線文系球胴形土器には、東北地方内における伝統性と東北—中部日本をつなぐ共通性がともに存在するのである。

整理不十分のまま列挙したが、大木6式は浮線文系球胴形という特別な部分を通して中部日本の土器と型式的特徴のつながりを維持したのである。大木6式系と見られる球胴形土器そのものが、十三菩提式中段階・真脇式期の関東・中部高地・北陸の遺跡に点々と入っている。

北陸と大木6式の交渉は単純でなく、4期～5期には大木6式が日本海沿岸部から撤退するような形で北陸と円筒下層式の交流が展開するが、その時期にも内陸から太平洋側では、大木6式と関東の十三菩提式との交流が維持された³²⁾。それは大木6式5期から糠塚式初期にかけて一層強まり、東北地方南部の土器が南関東へ進出し³³⁾、五領ヶ台式の主要系統となる展開を迎える。

第4章. 広域での対比

1. 中部日本との編年の対比

大木6式を5期に区分してきた。これは連続的に変化する各系統について対応関係に注意しながら区切ってきたのであり、分期の線が別の系統間でぴったり対応する保障はないが、完全にずれてしまうようなことはないはずである。次にこれらが関東地方の十三菩提式の古・中・新の3段階区分にどう対応するか検討したい。関東の十三菩提式古段階は前後2段階に、新段階も前後2段階に分けられる。中段階もいくつかに分けられることは確かであるが、区分について明確な提案は行っていない³⁴⁾。関東と中部高地や北陸との対比は出来ているので、これによって東北地方と中部日本全体の緊密な時間的対応が可能になる。

1期

上道遺跡から出た十三菩提式古段階の破片（報告書17図73）は大木6式1期ほぼ単純の様相に伴ったものである。やはり大木6式1期単純の上ノ原遺跡に、かなり崩れているが北陸の（関東経由で変形したものでない）鍋屋町系とみられる土器（報告書8図14）がある。口縁部の三角形を並べた文様は鋸歯文の模倣であろう。その下の文様はよくわからないが、胴部は鍋屋町系文様の単純化したものとみられ、胴下半部が縄文なものも鍋屋町系に従っている。福島県会津高田町中丸遺跡³⁵⁾の十三菩提式古段階の破片も、伴った可能性のある東北の土器としては大木6式1期があるだけである。

2期

山形県高瀬山遺跡 ST1341住居址は他の時期の混在もあるが、2期を主体としており、ここに十三菩提式古段階の破片（報告書110図150）がある。

3期

宮城県小梁川遺跡には関東系の土器、とくに十三菩提式中段階のものがかなり出ているが、東北側の土器に時間幅があり、遺構などでの共伴関係もはっきりしないため細かい編年の対応を見るのには向いていない。山形県吹浦には大木6式3期と真脇式の遺構内共伴例がいくつかあるが³⁶⁾、真脇式は十三菩提式中段階に相当する。関東では神奈川県室の木遺跡³⁷⁾で十三菩提式中段階のほぼ単純な様相に大木6式3期の球胴形・長胴形土器が伴っている。群馬県富岡市内匠諏訪前A10号住居でも3期の球胴形が十三菩提式中段階と伴出している。³⁸⁾

4期

最近報告された新潟県巻町南赤坂遺跡の主要部は真脇式末期に位置づけられる。浮線文系球胴形土器は3期末に集中している（というよりも、ここまでを3期としたい。）ので、真脇式（十三菩提式中段階並行）が3期に、次の朝日下層式から4期に対応することになる。

真脇遺跡では朝日下層式に4期の球胴形（報告書図4の33）が伴ったとされる。朝日下層式と大

大木 6 式各段階と周辺地域の型式の対応関係

	関 東	北 陸	東北中・南部	東 北 北 部
前期末	十三菩提式古段階前半	鍋屋町式第1段階	大木 6 式 1 期	円筒下層 c 式
	十三菩提式古段階後半	鍋屋町式第2段階	大木 6 式 2 期	円筒下層 c 式？
	十三菩提式中段階	真脇式	大木 6 式 3 期	円筒下層 d 1 式
	十三菩提式新段階前半	朝日下層式	大木 6 式 4 期	円筒下層 d 1 式
	十三菩提式新段階後半	新保式上安原段階	大木 6 式 5 期	円筒下層 d 2 式
中期	五領ヶ台 I 式	新保式第 II 段階	糠塚	円筒上層 a 1 式

木 6 式 4 期の間で浮線の細かいジグザグが共通することも同時期を示すものであろう。朝日下層式は関東では十三菩提式新段階前半に当たる。朝日下層式、十三菩提式新段階前半に見られる細密な浮線による小円形の貼付は、吹浦遺跡の球胴形 4 期の土器（15図 4）³⁹⁾にも見られる。

5 期

南東北における 5 期の主体となる土器は、横浜市霧ヶ丘遺跡第 2 地点⁴⁰⁾の前期末の土器と同じものといつてよい。霧ヶ丘第 2 地点はまだ浮線文を多用し、私の十三菩提式の分期では新段階の後半であり、前期の最終末となる。

対応関係

以上から 1 期， 3 期， 4 期， 5 期がそれぞれ十三菩提式古段階・中段階・新段階前半， 新段階後半に高い確実性をもって対応されることになる。 2 期は古段階後半に並行する可能性が高い。

2. 前期と中期の境界

時期の区分というものは本来存在するものでなく、現在の研究者が研究の必要上設定するものであることは言うまでもない。その設定にあたっては、他の地域とずれないように注意することが一番重要であるが、境界線の変更は多くの問題を起こすので、学史が正当である範囲において学史に忠実であることが要求される。東北地方中・南部では大木 6 式までを前期， 大木 7 a 式を中期とした山内清男氏の設定が基本的な学史となる。大木 7 a 式は零細な資料から設定されたため、その資料をもって型式の範囲を決めることは難しい。もともと範囲がはっきりしないのだから東北の中期初頭をすべて大木 7 a 式と呼ぼうというのもひとつの提案であろう。しかしそれが後に糠塚式として提案されるものを含んでいなかったことも確かである。糠塚式がほぼ関東の五領ヶ台 I 式に対応することのほうが、大木 7 a 式の範囲よもむしろ確かなことであった。糠塚式の内容が十分検討されてこなかったという問題はあるが、糠塚式の位置づけに関する各氏の主張⁴¹⁾は正しいものであったのだから、やはり五領ヶ台 I 式に対応する糠塚式と五領ヶ台 II 式に対応する大木 7 a 式として型式設定すべきと考える。いうまでもなく東北地方の中期初頭は、糠塚式と大木 7 a 式の区分だけで

は十分でない時間的変化がある。

前期終末と中期最初頭は南東北と南関東でまったく同じ土器を共有している。よって私が1974年以来主張⁴²⁾してきたように十三菩提式新段階後半と五領ヶ台式I a式の間前期と中期の境界を引くなら、自動的に大木6式の5期と糠塚式初頭の間が東北地方における境界線になる。関東で大木6式5期に伴出する踊場式古段階は北陸の新保式上安原段階に並行し、これに石川県上安原遺跡でまとまった量の大歳山式末期の土器がともなっている。大歳山式は山内氏によって前期末に位置づけられた型式であるから、地域間の対応においても学史に対しても矛盾するところはない。

註

- 1) 今村啓爾 2006「縄文前期末における北陸集団の北上と土器の動き」『考古学雑誌』投稿中
- 2) 今村啓爾 1985「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4号
- 3) 松田光太郎 2003「大木6式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』39号
- 4) 松田光太郎 2004「東北地方北部における縄文時代前期から中期への移行期の様相」『神奈川考古』40号
- 5) 今村啓爾 2006「松原式土器の位置と踊場系土器の成立」『長野県考古学会誌』投稿中
- 6) 註1
- 7) 松田光太郎氏は2002年の「関東・中部地方における十三菩提式土器の変遷」(『神奈川考古』38号)で横浜市中駒遺跡出土の大木6式5期と区別できない土器やこれに並行する踊場系土器を「十三菩提式新2段階」として前期終末に位置付けた。これと翌年の「大木6式土器の変遷とその地域性」における前期・中期の境界には明らかにずれがある。
- 8) 小島俊彰 1986「第6群土器 真脇式期」(能都町教育委員会『石川県能都町真脇遺跡』)
- 9) 興野義一 1970「大木5b式土器の提唱—宮城県長者原遺跡出土資料による—」『古代文化』22-4
- 10) 宮城県教育委員会 2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書192集
- 11) 山形県教育委員会 1986『大檀B・C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 12) 会津高田町教育委員会 1983『会津高田町遺跡試掘調査報告書』会津高田町文化財調査報告書第3集
- 13) 宮城県教育委員会 1986『小梁川遺跡 遺物包含層土器編』宮城県文化財調査報告書第117集(七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ)
宮城県教育委員会 1987『小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集(七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ)
- 14) 山内清男作成「青森県是川一王寺貝塚出土円筒下・上層土器の型式別写真」「宮城県大木囲貝塚出土大木式型式別写真」山内先生没後25年記念論集刊行会 1996『画龍点睛』
- 15) 水沢市教育委員会 1965『水沢の原始・古代遺跡』
- 16) 草間俊一 1974「中島遺跡」(水沢市教育委員会『水沢市史』1), 原始—古代図版15の注記
- 17) 福島県山都町教育委員会 1983『上ノ原遺跡』福島県山都町文化財調査報告第4集
- 18) 福島県東和町文化財調査報告書 1990『上台遺跡発掘調査報告書』福島県東和町文化財調査報告書
- 19) 福島県教育委員会 1994『東北横断自動車道遺跡調査報告27—鴨ヶ館跡(第2次)』福島県文化財調査報告書第307集
- 20) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987『和光6区遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興

今 村 啓 爾

事業団埋蔵文化財調査報告書第114集

- 21) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『新田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第405集
- 22) 山形県埋蔵文化財センター 2004『高瀬山遺跡(1期)』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集
- 23) 福島県文化財センター 1991『東北自動車道遺跡調査報告11-法正尻遺跡』福島県文化財調査報告書第243集
- 24) 小野 昭 1994「豊原遺跡」新潟県巻町『巻町史』資料編1 考古
- 25) 巻町教育委員会 2002『南赤坂遺跡』
- 26) 註1
- 27) 庄内古文化研究会 1955『吹浦遺跡』
- 28) 須原 拓 2005「大木7a式にみられる集合沈線文系土器について」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』24が岩手県の資料を集成しているが、中期初頭に下るものも多く、系統的に一括すべきでないものも含まれる。宮城県、福島県にも類例は多い。
- 29) 藤岡一雄 1988「中尾遺跡」『群馬県史』資料編1
- 30) 註5
- 31) 註5
- 32) 今村啓爾 2006「縄文土器系統の担い手-関東地方から東北地方を北上した鍋屋町系土器の場合-」『伊勢湾考古』20号 投稿中
- 33) 大木6式5期における進出は、横浜市中駒遺跡、霧ヶ丘第2地点など特定の遺跡に限定されながらも大きな比率を占めることがある。五領ヶ台Ia式期には南西関東に広く展開する。(今村啓爾・松村恵司 1971「横浜市日吉中駒遺跡の中期縄文式土器」『考古学雑誌』57巻1号)
- 34) 今村啓爾 2001「十三菩提式前半期の系統関係」『土曜考古』25号
- 35) 福島県会津高田町教育委員会 1981『会津高田町永井野・尾岐地区県営圃場整備事業関連発掘予備調査報告』福島県会津高田町文化財発掘調査報告書第1集(図版13-6)
- 36) 山形県教育委員会 1988『吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集
- 37) 横須賀市考古学会 1973『横浜市室ノ木遺跡』横須賀市考古学会研究調査報告2,(報告書9図1, 2, 17図21, 22図2)
- 38) 群馬県教育委員会 1992『内匠諏訪前遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第138集
- 39) 山形県教育委員会 1985『吹浦遺跡第2次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書93集(第60図)
- 40) 今村啓爾編 1973『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団
- 41) 林 謙作 1965「縄文文化の発展と地域性-東北地方」『日本の考古学』II 河出書房
小笠原好彦 1968「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器」『仙台湾周辺の考古学的研究』(宮城県の地理と歴史第3集) 宮城教育大学歴史研究会
- 42) 今村啓爾 1974「登計原遺跡の縄文前期末の土器と十三菩提式土器細分の試み」(登計原遺跡調査会『とけっぱら遺跡』)

本論文は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究B 課題番号15320106 研究代表者 今村啓爾)「異系統土器の出会いに見る集団の移動・居住・相互関係、背後にある社会の形態」(平成15年度~18年度)による成果の一部である。

大木6式土器の諸系統と変遷過程

以下図のみ使用

- 秋田県教育委員会 2001『岱Ⅱ遺跡ほか』秋田県文化財調査報告書第314集
- 岩手県教育委員会 1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XV-2』岩手県文化財調査報告書第70集（鳩岡崎）
- 岩手県教育委員会 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書-雫石町塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第31集
- 岩手県文化財愛護協会 発行年不明『大船渡市清水貝塚発掘調査概報』
- 盛岡市教育委員会 1982『大館遺跡群大館町遺跡-昭和56年度発掘調査概報』
- 北上市教育委員会 1983『滝ノ沢遺跡（1977～1982年度調査）』北上市文化財調査報告第33集
- 北上市教育委員会 1990『樺山遺跡（1989年度）』北上市文化財調査報告第59集
- 北上市教育委員会 1991『滝ノ沢遺跡Ⅲ（1984・86・87・88・90年度調査）』北上市文化財調査報告第63集
- 北上市教育委員会 1996『樺山遺跡（1992・1993年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第25集
- 胆沢町教育委員会 1988『浅野遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第17集
- 宮城県教育委員会『埋蔵文化財緊急発掘調査概報-長根貝塚-』宮城県文化財調査報告書第19集
- 福島県教育委員会 1991『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告XI-鹿島遺跡』福島県文化財調査報告書第266集
- 福島県教育委員会 1999『福島空港公園遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県文化財報告書第372集（関林）
- 福島市教育委員会 1989『昭和63年度市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡調査報告-愛宕原遺跡』福島市埋蔵文化財報告書第31集
- 興野義一 1970「大木式土器理解のために（V）」『考古学ジャーナル』32